

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集

諫早農業高校遺跡

平成29年度諫早農業高校
草花管理室・収納室改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集

諫早農業高校遺跡

平成29年度諫早農業高校
草花管理室・収納室改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2018

長崎県教育委員会



写真1 遺跡遠景（東から。小野干拓地より大村湾方面を望む）



写真2 遺跡近景（東から。船越丘陵を望む）

なだらかな丘陵の奥に城山と高城からなる低山地が横たわる。その向こうの小船越を抜けると大村湾へつながる。この丘陵に、弥生時代には拠点的な集落が栄え、古代には官道が南北に貫いていたのである。中世～戦国期には、船越氏や伊佐早氏、西郷氏らが館を構えていたと考えられている。



写真3 調査区北壁土層断面状況（東から）



写真4 調査区東壁土層断面状況（北から）



写真5 壱棺墓 ST04 検出状況（北から）



写真6 土器埋設ビット SP81(左)・218 検出状況（北東から）



写真 7 火葬土坑 ST01 完掘状況（北から）



写真 8 据立柱建物跡 SB03 完掘状況（東から）



写真 9 遺構完掘状況（上が東）



写真10 伝・明治39年出土鋼剣 (長崎県埋蔵文化財センター所蔵)

刊行にあたって

本書は、平成 29 年度諫早農業高校草花管理室・収納室改築工事に伴い実施した諫早農業高校遺跡の発掘調査報告書です。

諫早農業高校の前身である長崎県立農学校は明治 40 (1907) 年に開校しました。その用地造成時には弥生時代の甕棺と銅劍が発見されたと伝えられており、現在も残る銅劍は県指定の有形文化財となっています。

また、遺跡のある立石町・船越町の一帯は、古代の駅家である船越駅があったと考えられています。さらに後の時代では、正応元 (1288) 年に船越氏が築城し、南北朝期には伊佐早氏が居城した船越城の比定地となっています。

この度の発掘調査では、弥生時代の甕棺や古代の縁釉陶器の小片が見つかったほか、室町時代の建物跡及び火葬土坑を検出しました。弥生時代の集落範囲の一端が分かったことや、船越駅及び船越城を考えるうえでの資料を得たことなど、大変意義深いものとなりました。

この発掘調査にあたって御協力いただいた諫早市政策振興部文化振興課をはじめ諫早市美術・歴史館、諫早市立図書館など多くの皆様方に深く感謝を申し上げますとともに、この調査成果が学術的に広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成 30 年 3 月

長崎県教育委員会教育長

池松 誠二

例　　言

1. 本書は、平成 29 年度諫早農業高校草花管理室・収納室改築工事に伴い実施した諫早農業高校遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は平成 29 年度諫早農業高校草花管理室・収納室改築工事に伴う諫早農業高校遺跡発掘調査報告書作成費にもとづいて発行した。
3. 本事業は長崎県教育庁教育環境整備課が事業主体となり、発掘調査主体は長崎県教育委員会が、発掘調査は長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センターが担当した。発掘調査の長崎県遺跡調査番号は INK201701 である。
4. 発掘調査のうち基準点測量・空中写真撮影・放射性炭素年代測定はそれぞれ業務委託を行った。
基準点測量：扇精光コンサルタント株式会社　　空中写真撮影：株式会社大信技術開発
放射性炭素年代測定：株式会社パレオ・ラボ
5. 平面直角座標は世界測地系を、方位は座標北を用いている。
6. 発掘調査に係る現地指導・情報・資料提供など以下の方々に御指導・御協力いただいた（敬称略、所属順）。
野澤哲朗・前田加美（諫早市政策振興部文化振興課学芸員）、古賀力・秀島貞康（諫早史談会）、川畑敏則・堀内和宏（長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所）、安楽勉（長崎市出島復元整備室）
7. 本書に収録した遺物の実測および製図は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。
8. 金属製品の透過エックス線撮影及び保存処理は、長崎県埋蔵文化財センター調査課片多雅樹係長、鷲島英文化財調査員が行った。
9. 本書収録の遺物・図面・写真類は長崎県埋蔵文化財センターに保管している。
10. 本書収録の 3 枚の遺物番号は収蔵登録 ID「INK201701-□□□」の枝番号部分と一致する。また、収蔵登録 ID は遺物へ注記し収蔵台帳に記載している。
11. 卷頭図版 6 の銅劍は長崎県埋蔵文化財センターに保管している。また写真及び 3D レプリカ復元は長崎県埋蔵文化財センターが行った（片多・吉井・白石 2014）。
12. 本書に掲載した地質図は、地質図幅「北部（縮尺 1:200,000）」『九州地方土木地質図』（九州地方土木地質図編纂委員会 1985）を使用し作成したものである。
13. 本書に掲載した周辺遺跡分布図は、国土地理院コンテンツの標準地図・色別標高図・傾斜量図タイルを使用し加工して作成したものである。引用元 URL：国土地理院ウェブサイト <https://maps.gsi.go.jp/#5/35.362222/138.731389&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0&d=v>
14. 本書の執筆・編集は松元が行った。なお、第IV章第2節第2項中の剥片石器及び第IX章第1項「石器」についての執筆・分析・実測図作成は川道寛が行った。

本文目次

I. 遺跡の環境	1	VII. その他の遺構と遺物	28
1. 地理的環境	1	1. 遺構	28
2. 歴史的環境	2	(1) 土坑 SK01・SC01	
(1) 弥生時代		(2) 燃土を伴う遺構 SL01	
(2) 古代		2. 遺物	29
(3) 中世		VIII. 自然科学分析	39
II. 調査に至る経緯	6	IX. 総括	43
1. 調査に至る経緯	6	1. 石器	43
(1) 学校用地造成と遺跡の発見、周知化		(1) 黒曜石製剝片石器群の分析	
(2) これまでの範囲確認調査		(2) 黒曜石製剝片石器群の位置実測	
(3) 平成27年度諫早農業高校野菜温室改築計画		(3) 蛍光X線分析による原産地分析	
2. 範囲確認調査	7	2. 墓棺墓と集落	47
(1) 調査期間と面積		3. 中世	47
(2) 調査体制		(1) 挖立柱建物跡	
(3) 調査内容		(2) 火葬土坑	
III. 調査の概要	9	(3) 小結	
1. 調査期間と面積	9	【引用・参考文献】	50
2. 調査体制	9		
3. 発掘調査の流れ	9		
(1) 工事事業計画			
(2) 発掘調査の流れ			
4. 層序と地形	9		
(1) 基本層序			
(2) 旧地形の推定			
5. 調査の概要	10		
6. 整理作業・報告書作成	10		
IV. 縄文・弥生時代の遺構と遺物	13		
1. 遺構	13		
(1) 墓棺墓 ST04			
(2) 燃土を伴う遺構 SL03			
(3) 土器集中 SU01～03・04			
2. 遺物	15		
(1) 石器			
(2) 土器			
V. 古墳時代の遺構と遺物	20		
1. 遺構	20		
(1) 土器埋設ピット SPS1・218			
2. 遺物	20		
(1) 土師器			
(2) 須恵器			
VI. 古代・中世の遺構と遺物	22		
1. 遺構	22		
(1) 挖立柱建物跡 SB03			
(2) ピット群			
(3) 葬送関連遺構 ST01			
(4) 土坑 SK02・03			
(5) 燃土を伴う遺構 SL02			
2. 遺物	26		
(1) 黒色土器			
(2) 土師質土器			
(3) 瓦質土器			
(4) その他			
VII. その他の遺構と遺物	28		
1. 遺構	28		
(1) 土坑 SK01・SC01			
(2) 燃土を伴う遺構 SL01			
2. 遺物	29		
VIII. 自然科学分析	39		
IX. 総括	43		
1. 石器	43		
(1) 黒曜石製剝片石器群の分析			
(2) 黒曜石製剝片石器群の位置実測			
(3) 蛍光X線分析による原産地分析			
2. 墓棺墓と集落	47		
3. 中世	47		
(1) 挖立柱建物跡			
(2) 火葬土坑			
(3) 小結			
【引用・参考文献】	50		

図目次

図 1 表層地質図 (S=1/100,000)	1
図 2 弥生時代長崎県本土域の拠点集落	2
図 3 古代駅路の概念図	3
図 4 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)	5
図 5 過年度の調査箇所位置図 (S=1/6,000)	7
図 6 トレンチ土層断面図 (S=1/40) 及び 出土土器実測図 (1/4)	8
図 7 調査区土層断面図 (S=1/80)	11
図 8 遺構分布図 (S=1/80)	12
図 9 ST04 実測図 (S=1/20)	13
図 10 SL03 実測図 (S=1/20)	14
図 11 遺物実測図〔縄文・弥生時代石器〕(S=2/3)	16
図 12 遺物実測図〔弥生時代石器〕(S=1/3・1/1)	17
図 13 ST04 出土土器実測図 (S=1/4)	18
図 14 遺構・包含層出土 遺物実測図〔弥生土器〕(S=1/4)	19
図 15 SPS1-218 実測図 (S=1/20)	20
図 16 SPS1-218 及び遺構・包含層出土 遺物実測図〔古墳時代土器〕(S=1/4)	21
図 17 SB03 実測図 (S=1/80)	23
図 18 ST01 実測図 (S=1/20)	25
図 19 SK02・SL02 実測図 (S=1/20)	25
図 20 SB03・その他ピット・遺構・包含層出土 遺物実測図〔古代・中世土器〕(S=1/4)	27
図 21 SK01・SL01 実測図 (S=1/20)	28
図 22 黒曜石製剝片石器 (蛍光X線分析測定資料)	43
図 23 弥生時代中期前半の黒曜石製剝片石器群	44
図 24 九州黒曜石原産地判別図	45
図 25 スタンプ文瓦質火鉢の類型 (S=1/4)	47
図 26 火葬土坑・木棺墓類型 (S=1/40)	49

表目次

表1	周辺遺跡一覧	4
表2	諫早農業高校遺跡の発掘調査等の履歴	6
表3	ピット一覧1	30
表4	ピット一覧2	31
表5	ピット一覧3	32
表6	ピット一覧4	33
表7	遺物一覧1(土器・陶磁器)	34
表8	遺物一覧2(土器・陶磁器)	35
表9	遺物一覧3(土器・陶磁器)	36
表10	遺物一覧4(土器・陶磁器)	37
表11	遺物一覧5(石器)	38
表12	黒曜石蛍光X線分析資料一覧	46

写真目次

【卷頭図版】

写真1 調査区東側

写真1 遺跡遠景(東から。小野干拓地より大村湾方面を望む)

写真2 遺跡近景(東から。船越丘陵を望む)

写真3 調査区北壁土層断面状況(東から)

写真4 調査区東壁土層断面状況(北から)

写真5 貝塚墓 ST04 検出状況(北から)

写真6 土器埋設ピット SP81・218 検出状況(北東から)

写真7 火葬土坑 ST01 完掘状況(北から)

写真8 握立柱建物跡 SB03 完掘状況(東から)

写真9 遺構完掘状況(上が東)

写真10 伝・明治39年出土銅劍

【本文写真】

写真11 その他の遺物

【写真図版】

写真図版1

写真12 平成27年度範囲確認調査

トレンチ土層断面状況(東から)

写真13 表土掘削状況(西から)

写真14 遺構調査状況
(西から。金比羅岳方面を望む)

写真図版2

写真15 北東半1 遺構検出状況(南から)

写真16 北東半2 遺構検出状況(南から)

写真17 北西半1 遺構検出状況(南から)

写真図版3

写真18 南東半1 遺構検出状況(北から)

写真19 南東半2 遺構検出状況(北から)

写真20 南西半2 遺構検出状況(北から)

写真図版4

写真21 SU06(ST04) 検出状況(西から)

写真22 ST04骨片・焼土粒検出状況(西から)

写真23 ST04 完掘状況(北から)

写真図版5

写真24 SU03 検出状況(南から)

写真25 SU04 検出状況(南から)

写真26 遺物出土状況(南東から)

写真図版6

写真27 SL03 断削状況(西から)

写真28 SP218 半裁状況(南から)

写真29 ST01 検出状況(東から)

写真30 ST01 半裁状況(南東から)

写真31 SK02 半裁状況(南から)

写真32 SK02 底面検出状況(南から)

写真33 SK01 完掘状況(南から)

写真34 SK03 検出状況(北から)

写真図版7

写真35 SL01 検出状況(北から)

写真36 SL01 断削状況(南から)

写真37 SL02 検出状況(北から)

写真38 SL02 半裁状況(東から)

写真39 SP01(SB03) 半裁状況(南から)

写真40 SP150(SB03) 半裁状況(西から)

写真41 SP150(SB03) 完掘状況(北から)

写真42 SP11(SB03) 半裁状況(東から)

写真図版8

写真43 SP159(SB03) 半裁状況(西から)

写真44 SP159(SB03) 磁板石出土状況(北西から)

写真45 SP137(SB03) 磁板石出土状況(東から)

写真46 SP226(SB03) 半裁状況(南から)

写真47 SP226(SB03) 遺物出土状況(南から)

写真48 SP226(SB03) 完掘状況(北から)

写真49 SP225(SB03) 磁板石出土状況(北から)

写真50 SP225(SB03) 完掘状況(北から)

写真図版9

写真51 SP63(SB03) 半裁状況(南から)

写真52 SP22(SB03) 磁板石出土状況(北西から)

写真53 SP107(SB03 底) 半裁状況(南から)

写真54 SP69(SB03 底) 半裁状況(南から)

写真55 SP48 遺物出土状況(南から)

写真56 SP03 遺物出土状況(南から)

写真57 SP195 半裁状況(西から)

写真58 SP117 半裁状況(北から)

写真図版10

写真59 貝塚墓 ST04 出土土器1

写真図版11

写真60 貝塚墓 ST04 出土土器2

写真61 土器集中・包含層出土土器(弥生時代)

写真図版12

写真62 SP81・218 出土土器、

包含層出土土器(古墳時代)

写真63 SB03 出土土器・陶磁器(中世)

写真図版13

写真64 ピットSP 出土土器(古代・中世)

写真65 包含層出土土器・陶磁器(古代・中世) 1

写真図版14

写真66 包含層出土土器・陶磁器(古代・中世) 2

写真67 遺構・包含層出土土器(弥生時代)

I. 遺跡の環境

1. 地理的環境

諫早農業高校遺跡の所在する諫早市は長崎県本土部の南央に位置する。東の島原半島、西の長崎半島と北の多良山系を繋ぐ諫早地峡にあたり、東に有明海、西に大村湾、南に橘湾と面する地理的結節点である。一帯の基盤は新生代古第三紀（4～5,000万年前）に形成された砂岩・泥岩よりなる諫早層群で、その上に新第三紀～第四紀更新世の火山性堆積物が載っている。遺跡より南側には有喜火山岩類（160万年前）の火山性岩石及び碎屑物が広がる。北側は古期多良岳火山岩類（100万年前）の火山麓扇状地堆積物にあたる。凝灰角礫岩からなる火山性岩石及び碎屑物は地元でドンク盤と呼ばれる地盤となっている。

これら主として火山岩類に由来する地形を大小の河川が開析し、裾野へ向かい八つ手状に長く伸びる丘陵を形成している。市内を東流する一級河川・本明川は多良岳火山麓扇状地に端を発し有明海に

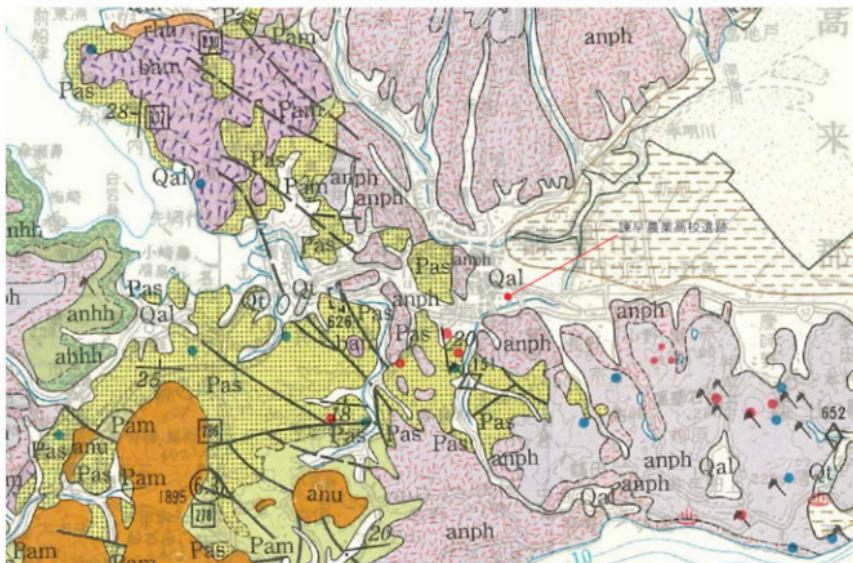


図1 表層地質図 (S=1/100,000)

地質図幅「北部（縮尺 1:200,000）」『九州地方土木地質図』（九州地方土木地質図編纂委員会 1985）をもとに作成

【堆積岩類】

第四紀
完新世 — 沖積層
— 層状地堆積物
— Gt 砂・粘土
— Qt 砂・粘土

【噴出岩類】

第四紀	— 完新世～更新世	— Gt 砂・粘土 — Qt 砂・粘土	第四紀	— 完新世～更新世	— Qal 硅・砂・粘土 — anph 角閃石安山岩・玄武岩 — anu 角閃石安山岩・輝石安山岩・玄武岩
古第三紀	— 始新世	— 諫早層群			
			新第三紀	— 更新世～中新世	— bam 玄武岩(アルカリアリゾナイト質等) — anph 輝石安山岩・玄武岩 — anhh 凝灰角礫岩 — anbh 角閃石安山岩 — anq 凝灰角礫岩 — rhb 流紋岩・石英安山岩

【堆積岩類】
— Pas 破壊・泥岩、等
— Pam 黄岩・砂岩、等

流入する。近隣の低位山地・御館山付近に始まる半造川も同様に東流し現在では本明川に合流している。遺跡は地峡部の東端にあたり、北の本明川と南の半造川に挟まれた低位丘陵の東端に位置する。この船越丘陵の表層地質は、西の根元付近で諫早層群が露出するが、東の中位面は火山麓扇状地堆積物で覆われ、さらに東端は疊・砂・泥からなる沖積層で形成される。干潟の陸化以前、船越丘陵は有明海に突き出す舌状の地形を呈していたと考えられる。

一方、丘陵の西側には八天岳北麓を源とする東大川が北西に流れ大村湾の支湾である津水湾へと注いでいる。半造川を上流に遡ると小船越町あたりで東大川と近づき直線距離で 600 mほどとなる。地勢的には、遺跡に南接する半造川を伝い大村湾へと抜けるルートにおける有明海側の玄関口にあたる。かつて本明川沿いで大村方面へと抜けるルートにもアクセスできる好位置にある。

2. 歴史的環境

(1) 弥生時代

弥生時代の遺跡では墳墓遺跡と遺物包含地が諫早湾沿岸部及び津水湾奥部に認められる。小栗 A～C 遺跡の位置する鷲崎丘陵先端部では、弥生時代中期前半から後期にかけての甕棺墓・箱式石棺墓が、らなる墓域が広がる。津水湾奥部では、滑川遺跡で中期の甕棺墓・石棺墓が、化屋大島遺跡（消滅）で弥生時代前中期から中期初頭の箱式石棺墓群、貝津横島 A 遺跡で弥生・古墳時代の箱式石棺墓が検出されている。

前期の支石墓を除く中期以降の墳墓遺跡は、半造川河口両岸にあたる船越丘陵・鷲崎丘陵の先端部及び津水湾奥部に多く、それぞれ諫早湾と大村湾を繋ぐルートの出入り口であることは興味深い。一方で居住域等を示す集落遺跡の様相は判然としない。遺物包含地遺跡における弥生土器は中・後期が多く、中期では北部九州系が主体であるなかで肥後系が認められる。後期では台付甕等の有明海系土器が目立ち始める傾向にある。

近年、台付甕や肥前型器台等を有明海系の文化要素とする議論が活発であり、そうした中で拠点集落の盛衰や役割が論じられている（宮崎 2015）。弥生時代中・後期における長崎県域の拠点集落に目を向けると、青銅製武器の出土した遺跡は壱岐・対馬を除き県土南半の遺跡である。細形銅劍の出土した当遺跡の他に、島原市景華園遺跡では多数の甕棺墓と細形銅劍・中細形銅矛が出土している。南島原市北岡金比羅遺跡では甕棺から銅劍が出土したとの伝聞が



図 2 弥生時代長崎県本土域の拠点集落

ある。また鉄製武器では、大村市富の原遺跡の甕棺から出土した鉄戈がよく知られている。宮崎氏は、佐世保市門前遺跡や東彼杵町白井川遺跡等の拠点集落も含め、有明海から大村湾・外洋へ、あるいは早崎瀬戸から橘湾・外洋へという、水上交通を前提としたルートを想定している。

(2) 古代

古代における当地域は西海道肥前国に属し、駿制や条里制等の律令的支配体制が敷かれる。『延喜式』(延長5(927)年)に記載されている肥前国の駅家のうち、長崎県内では「新分」・「船越」・「山田」・「野島」の4駅が該当する。

このうち「船越駅」の比定地として有力視されているのが遺跡のある船越丘陵である。

木下良氏は船越丘陵界隈での駅路について、現在の立石町と西郷町の大字界となっている直線道路を想定している(木下1994)。現在は主要地方道有喜本諫早停車場線となっており、かつては上野馬場と呼ばれた一帯である。木本雅康氏はこのルートを踏襲しているが、直線道路が鷲崎の丘陵にさしかかる地点より以南について別のルートを提示している。木下ルートが鷲崎と長野の丘陵間を流れる川床川沿いであるのに対し、木本ルートは鷲崎丘陵の尾根伝いの道となる。このルート沿いには安徳碑とされるものがあり、後の島原街道と長崎街道を結ぶ宇喜往還にもなっている。また、田井原や小野の一帯では「二の坪」・「三の坪」等の土地区画を示す小字名が残っており、条里遺跡として周知されている。特に田井原は船越駅の駅田である可能性が考えられている。

(3) 中世

平安時代末期には、現在の市域にあたる範囲が「伊佐早村」という名で荘園として宇佐神宮に寄進されている(建久8(1197)年『宇佐大鏡』)。この伊佐早庄はのちに仁和寺仏母院領となるが、実質的には地方豪族の船越氏が管理していたという(正和3(1314)年『深江文書』)。船越又次郎入道如覚が正応年間(1288年頃)に居城として築いた船越城の比定地が船越町の一帯である。船越氏を確認できる文献は深江文書が最後となる。以降は伊佐早氏が市域北部を支配するようになるが、南北朝期には領地をめぐる争いへと発展していく。北朝方の伊佐早氏は船越城を居城に半造川より北側を拠点とし、宇木城を居城に南側をおさえる南朝方の西郷氏と対立する。明徳3(1392)年の南北朝合一より後は西郷氏が諫早を治めることとなる。西郷氏は高城に居を移して沖城や真崎城等の支城を築き、干拓や農地の整備等を行なながら、近世まで諫早の地を治めていくことになる。

天正15(1587)年、西郷信尚が豊臣秀吉の九州平定に参陣しなかったため、領地は没収され筑後柳河の龍造寺家晴に与えられる。信尚は肥後国人一揆の際に高城を一時奪回するものの、秀吉の命令を受けた小早川隆景の指揮のもと家晴や鍋島氏、有馬氏により討伐され敗走する。一方の佐賀藩では慶長12(1607)年、龍造寺氏に代わって鍋島勝茂が藩主となる。西郷氏に取って代わった龍造寺氏は2代・直孝のときに姓を「諫早」に改め、鍋島氏の「御親類同格」として明治時代に入るまで「佐賀藩諫早領」を治めていく。

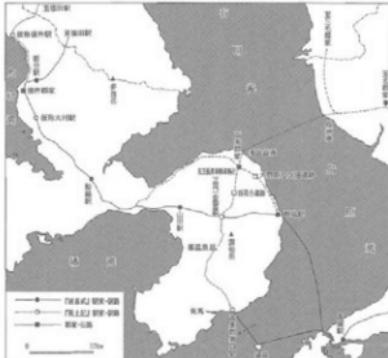


図3 古代駅路の概念図(木本2011)

時代略称
周辺遺跡一覽表

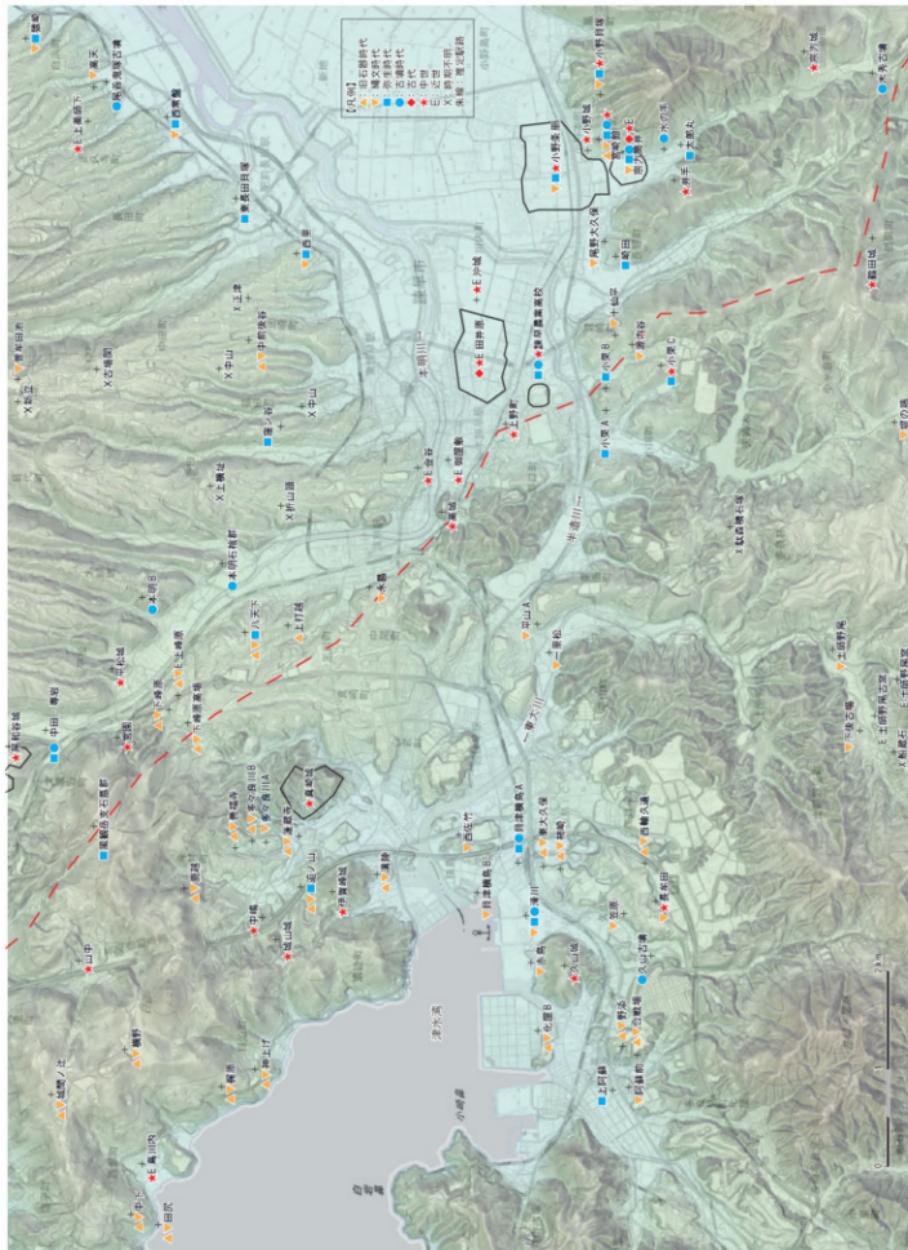


図4 周辺道路分布図 (S=1/50,000) 「標準地図及び傾斜量図データ」(国土地理院)をもとに作成

II. 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

(1) 学校用地造成と遺跡の発見、周知化

明治40（1907）年に開校した諫早農業高校の前身「長崎県立農学校」の用地造成時に、弥生時代の甕棺と細形銅劍が発見されたと伝えられている。発見された銅劍は時を経て、昭和46（1971）年に地元の古者・森多三郎氏により長崎県立美術博物館に届け出られた。森多氏は発見時に居合わせたわけではなく詳細は不明とのことだが、甕32個が出土しその1つから銅劍が出土、甕は全て廃棄されたという（正林1971）。その後しばらくは「立石遺跡」と呼称されていたが、昭和51（1976）年3月に文化庁が刊行した『全国遺跡地図 長崎県』には「農業高等学校遺跡」の名称で登載され周知が図られた。のちの『長崎県遺跡地図』には現在の名称である「諫早農業高校遺跡」として登載されている。

(2) これまでの範囲確認調査

学校用地造成・建設以降も校内における施設設置・改修等に伴い何度かの範囲確認調査が行われている（表2・図5）。總じて、近現代の掘削や造成による搅乱が著しいものの、その中からは弥生土器片や中世の土師質土器・陶磁器が多く出土している。また、地点によってはこれらを含む中世の包含層の残存が認められている。

表2 謞早農業高校遺跡の発掘調査等の履歴

【調査年】	【調査期間】	【調査面積】	【調査要因】
【遺構】	【遺物】		【備考】
明治39(1906)	—	—	【要因】学校建設
【遺構】伝・甕32個	【遺物】細形銅劍1振		【備考】以降、「立石遺跡」の呼称
昭和42(1967)	【備考】文化財保護審議委員会「全国遺跡地図 長崎県」に「農業高等学校遺跡」の名称で登載、周知が図られる。		
昭和46(1971)	【備考】正林謹「諫早市出土の銅劍」(九州考古学誌)1~44。前年に細形銅劍1振の届け出があり正林氏が聞き取りを行った。		
昭和51(1976)	【備考】文化庁「全国遺跡地図 長崎県」に「農業高等学校遺跡」の名称で登載、周知が図られる。		
平成6(1994)	【備考】長崎県教委「長崎県遺跡地図」に現在の名称「諫早農業高校遺跡」として登載、周知が図られる。		
平成3(1991)	【期間】7.17~7.18(範囲確認調査)	【面積】10m ²	【要因】管理棟改築工事
【遺構】なし	【遺物】弥生土器片65点、黒曜石・安山岩製石器12点、中・近世陶磁器片32点、鉄浮、ふるご、羽口等		【備考】遺物は全て搅乱層からの出土
平成12(2000)	【期間】9.19~9.22(範囲確認調査)	【面積】18m ²	【要因】草花温室改築実習地整備
【遺構】偽ビット2基	【遺物】貿易陶磁器片、土師質土器片		【備考】中世の包含層あり
平成14(2002)	【期間】2.4~2.8(範囲確認調査)	【面積】19m ²	【要因】草花温室改築実習地整備
【遺構】なし	【遺物】弥生土器片、中世陶磁器片		【備考】場所的に中世の包含層あり
平成17(2005)	【期間】1.13(工事立会)	【面積】18m ²	【要因】運動場排水改良事業
【遺構】浅状遺構1条	【遺物】		【備考】浅状遺構は幅1.5m・深さ0.4mで時限不明
平成27(2015)	【期間】10.26~10.30(範囲確認調査)	【面積】10m ²	【要因】野菜温室改築工事
【遺構】ビット10基	【遺物】ココナツ1箱分(石器約20点、土器・陶磁器約350点)、弥生土器片多数、黒曜石製石器剥片、土師質土器片、搖紗片等陶器		【備考】
平成29(2017)	【期間】5.8~6.9(本調査)	【面積】200m ²	【要因】草花管理室・収納室改築工事
【遺構】遺構総数約240基(甕棺墓1基、土器埋設ビット2基・土器坑3基・柱立柱建物跡1棟、火葬土坑1基・土坑3基・ビット20枚)	【遺物】弥生土器片多数、黒曜石片多数、須恵器片、土師質土器片、搖紗片等陶器片多数、瓦質大鉢片、掛瓦片多数、瓦質陶磁器片少数		【備考】縦軸細片1点、瓦質大鉢片、掛瓦片多数、瓦質陶磁器片少数

(3) 平成 27 年度諫早農業高校野菜温室改築計画

平成 27 年 10 月、翌年度に計画されていた野菜温室改築工事に係る諫早農業高校遺跡の取り扱いについて、県建築課、教育環境整備課、諫早農業高校事務局と県学芸文化課の間で協議がなされた。工事対象範囲は弥生時代の墳墓を含む集落跡や中世城館跡の可能性があり、遺跡の詳しい内容を把握するため範囲確認調査を実施することとなった。

2. 範囲確認調査

(1) 調査期間と面積

期間： 平成 27 年 10 月 26 日～平成 27 年 10 月 30 日

面積： 10 m²

(2) 調査体制

所長	山本忠敬
総務課長	小島克孝
調査課長	川道 寛
調査課 主任文化財保護主事	松元一浩
調査課 文化財調査員	前田加美

(3) 調査内容

① 調査方法

新築建物の予定範囲に改築前の建物やビニールハウスがあったため、改築前の建物基礎部分への接触やバックホウの導線を考慮し、予定範囲に接する位置に 2m × 2.5m のトレンチを 2 箇所設定した。過年度の範囲確認調査では表土及び搅乱層の厚いことが分かっており、バックホウによる表土掘削を行ったのち、その下の土層について人力による遺構検出等の作業を行った。

② 層序

1 層 黄褐色砂質土。しまりは弱い。
2cm 程の角砾を多量に含む。現表土。
客土。

2 層 暗褐色粘質土。しまりはある。礫・遺物等は含まない。客土。

3 層 暗褐色土。現代遺物を含む造成土。1～3 層の最大層厚 0.8m。

4 上層 暗褐色粘質土(Hue10YR3/4)。しまりはある。2～6cm 大の円砾を少量含む。炭が少量混じる。
遺物は中・近世の陶磁器と弥生土器の小片を多く含む。

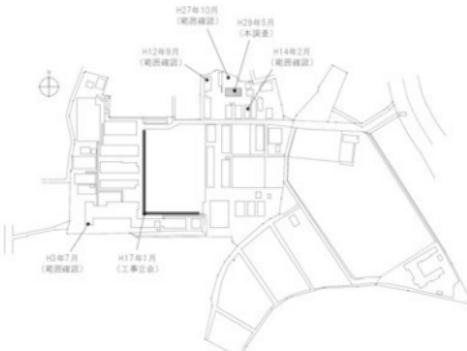


図 5 過年度の調査箇所位置図 (S=1/6,000)

4 下層 暗褐色粘質土 (Hue10YR2/3)。しまりはやや強い。2 ~ 10cm の円礫を 2 割程度含む。遺物は弥生土器片を含む。

5 層 褐色粘質土 (Hue10YR4/4)。しまりは強い。2 ~ 20cm 大の礫を 5 割程度含む。岩盤の風化層か。遺物は含まない。

③ 遺構

4 下層検出面において、TP 1 でピット 8 基、TP2 でピット 2 基が検出された。うち TP1 のピット 1 基からは、弥生時代後期の肥前型器台片が出土した。

④ 遺物

コンテナ 1 箱分（石器約 20 点、土器・陶磁器約 350 点）の遺物が出土した。内訳は弥生土器片多数、黒曜石製石器剥片、中世の土師質土器片、擂鉢等であり、弥生土器片は中期土器がほとんどである。

⑤ 処置

調査結果から工事による遺構や遺物包含層等の埋蔵文化財への影響があると判断され、取り扱いに関する協議が必要となった。

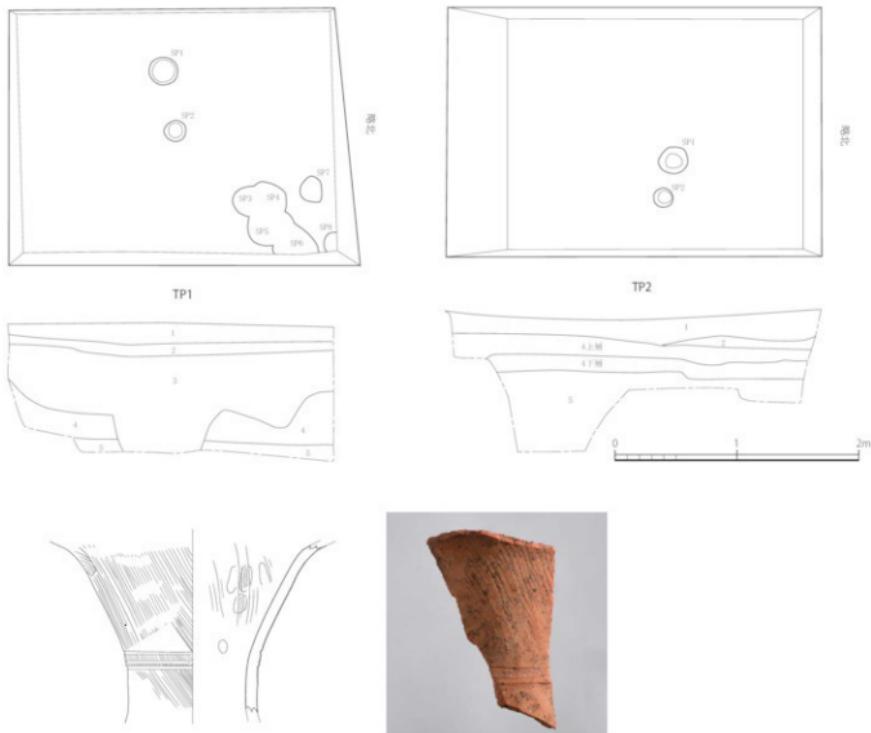


図 6 トレンチ土層断面図 ($S=1/40$) 及び出土土器実測図 (1/4)

III. 調査の概要

1. 調査期間と面積

期間： 平成 29 年 5 月 8 日（月）～平成 29 年 6 月 9 日（金）

面積： 200 m²

2. 調査体制

所長	岩永正弘
総務課長	田川正明
調査課長	川道 寛
調査課　主任文化財保護主事	松元一浩
調査課　文化財保護主事	宮木貴史
調査課　文化財調査員	千原和己

3. 発掘調査の流れ

(1) 工事事業計画

平成 27 年度の範囲確認調査の結果を受け本調査の期間として 5 週間が見込まれた。当初は平成 28 年度の事業計画であったが熊本震災の影響もあり平成 29 年度事業として再始動となった。平成 29 年 3 月に工事委託業務が始まり関係機関の間で協議が行われた。その中で、埋蔵文化財調査は 4 月の解体工事終了後の 5 月 8 日から 6 月 9 日にかけて行い、調査後すぐに新築工事に着工することが決定した。

(2) 発掘調査の流れ

新築建物の計画範囲全体 170 m²を対象に発掘調査を行い、検出した掘立柱建物跡の広がりを確認するため調査区北辺を 30 m²ほど拡張した。表土をバックホウにより掘削したのち、調査区北東隅にトレンチを掘削して層位を把握した。発掘作業員 22 名による遺構検出・遺構調査・遺物包含層掘削作業と並行して図化・写真撮影等の記録作業を行った。

4. 層序と地形

(1) 基本層序

1 層 淡黄色砂質土 (2.5Y8/4) しまりは強い。粘性は弱い。層中位に 2cm 程の角礫からなるバラス層を挟む。水捌けが頗る良い。層厚は 0.3 m 程度。現表土（客土）。

2 層 暗灰色極細砂質シルト土 (10YR5/1 ~ 4/1) しまりはやや強い。粘性はやや強い。層厚は 0 ~ 0.2 m。造成土。

3 層 暗灰黄色～オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/2 ~ 4/4) しまりはやや弱い。粘性はやや弱い。ガラスやレンガが混じる。層厚は 0.1 ~ 0.3 m。明治期の造成土。明治 39 年の学校用地造成によるものと考えられる。

4 層 黒褐色～暗褐色細砂質シルト土 (10YR2/3 ~ 3/3) しまりはやや強い。粘性はやや強い。

5cm長木溝の礫を1%未満含む。1cm長木溝の炭化物・焼土粒を3%未満含む。弥生時代中期及び中世を主とした土器片を多く含み、4層下位から5層上位にかけて弥生時代中期の単純層となる。4層上位は部分的に大ぶりの土器片集中部があるものの全体的には小片が混在する土層であり、原位置を保つ遺物はほとんどと考えられる。弥生時代中期より後、特に中世における營為により擾乱を受けている可能性が高い。中世の遺構は4層削平面で検出されている。層厚は0.2～0.5mで平均0.3m程度。範囲確認調査時の4上層。

5層 暗褐色粗砂質シルト土 (Hue10YR4/4) しまりは強い。粘性は強い。5cm長木溝の礫を3%含む。層下部ほど礫が多い。4層との層界は漸移的で5層上位15cmほどは弥生土器小片を含む。5層中位以下では遺物は出土していない。層厚は0.2～0.5mで平均0.4m程度。調査区の西側では6層を含め明治期の削平を受けており削平面に1～3層の造成土が載っている。範囲確認調査時の4下層。

6層 黄褐色礫質土 (Hue2.5Y5/4) しまりは非常に強い。粘性は弱い。15cm長木溝の円礫を4割ほど含み遺物は認められない。沖積層。範囲確認調査時の5層。

(2) 旧地形の推定

近代・現代の造成面である1～4層間の各層界は明瞭でおよそ水平をなしているが、4～6層の層界はわずかながら西高東低・南高北低となっており、およそ南西から北東に下る緩斜面の地形を呈している。5層上面の標高は5m前後である。第Ⅰ章で述べた船越丘陵の先端部にあたり、陸化以前は半造川河口にほど近い地点であったと推定される。

5. 調査の概要

検出した遺構総数は約240基で、内訳は掘立柱建物跡1棟・土坑3基・焼土坑3基・土坑墓1基・甕棺墓1基・ピット多数からなる(図8)。ほか、調査区北東半で複数の土器集中箇所(一部は甕棺)を検出した。なお、遺物包含層の4層は、上位0.2mほどは全面的に掘削、それより下位については調査区北辺・東辺に幅1mのトレンチを掘削したのみとなった。ただ、調査区全面にわたるピットの掘削調査において、ピットが同様の土器集中箇所を切る箇所は認められず、甕棺やその他の埋葬遺構が密集するような墓域である可能性は低いと考えられる。

遺物では、客土の1・2層ではほとんど遺物は見られなかったが、明治時代の造成土である3層中では、近代遺物に混じって弥生時代中期の土器小片を主とした遺物が出土した。遺物包含層である4層～5層上位で弥生時代中期土器の小片が多量に出土、大ぶりの中期土器片が集中する箇所もあった。同層ではまた、石製垂飾1点や多量の黒曜石剥片、須恵器片、中世を主とした土師質土器小片が出土した。また、掘立柱建物跡の柱穴を含むピットで炭化材が出土しており、建物やピット群の年代を推定するため放射性炭素年代測定を行った(第Ⅷ章)。

6. 整理作業・報告書作成

平成29年7月から翌年2月にかけて、埋蔵文化財センターにおいて報告書作成に向けた整理作業を実施した。遺物の整理は、水洗、接合、実測、ID番号付与、デジタルトレースの流れで行った。金属製品の保存処理は、透過エックス線撮影後にメスを用いて鋸取りを行いベンゾトリアゾール溶液に数秒浸した。処理完了後はチャック袋に収納しデシケータ内で保管している。

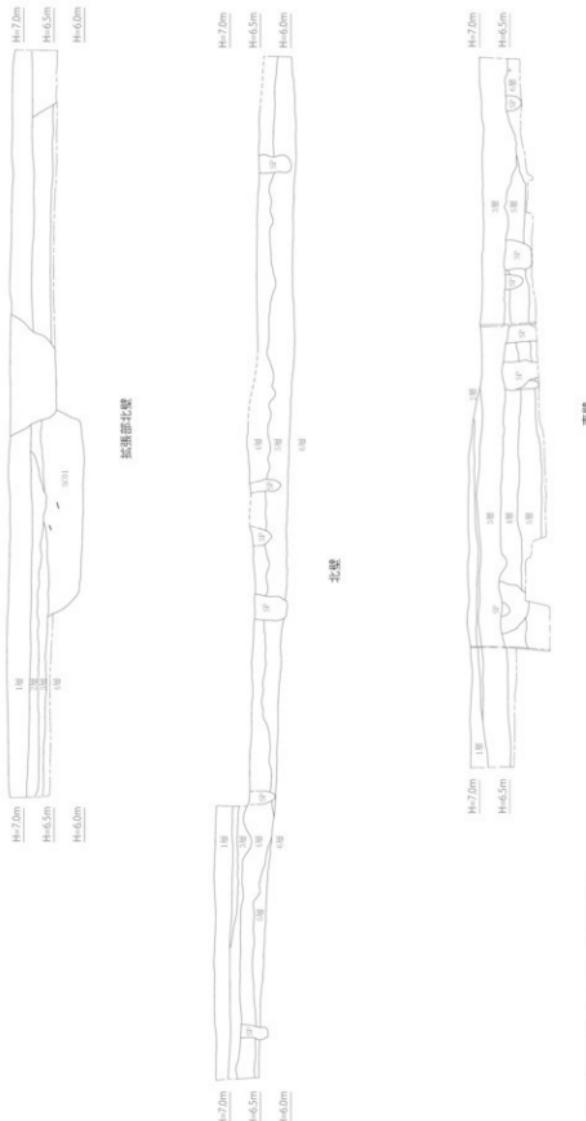


図 7 調査区土壤断面図 (S-1, 80)

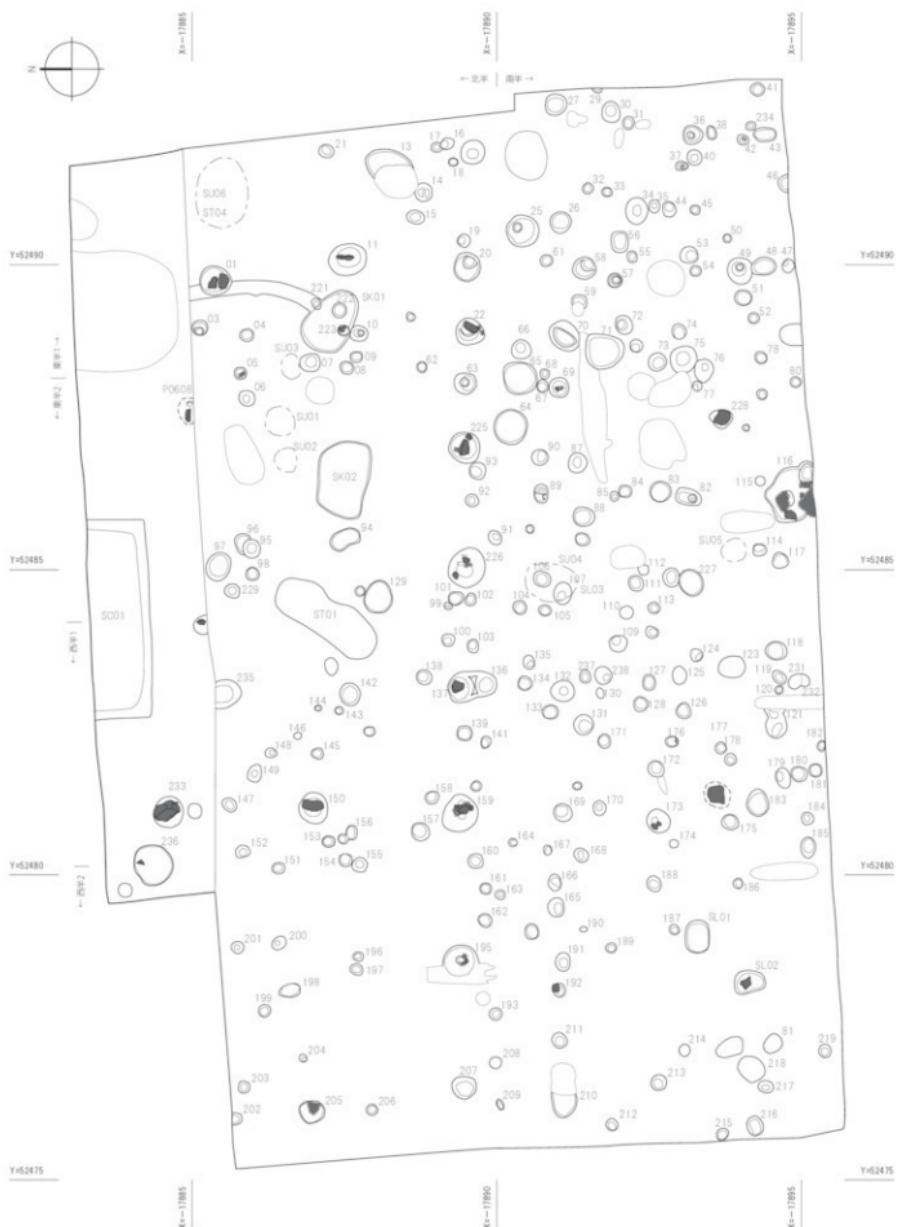


図8 遺構分布図 (S=1/80)

遺構番号のうちピットのSPは省略している。搅乱（近現代の土坑等）は灰色の上端ラインのみで示す。

IV. 縄文・弥生時代の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 壽棺墓 (S T)

① ST04

調査区北東隅に位置し、調査区の北辺と東辺にそれぞれ掘削したトレンチの狭間にあたる。先に4層中で検出していた土器片・石器剥片の集中するSU06を掘り下げ中に甕の胸部片がまとまって出土した。また、径5mm程の焼土粒が多く、骨片とみられる白色粒が少量混じっていた。周辺を精査したところ掘方の平面プランが検出された。一部の土器片はST04よりやや離れたSU01と接合する。

掘方の平面プランは略円形が二つ重なるような形態で切り合いは認められない。全長121cm・幅75cm以上・深さ0.4mを測る。掘方の東側から中央にかけて、004と009の壺が検出された。どちらも口縁部は出土していない。009の破片は散乱しており、一部は001と003の間に挟まれていた。また掘方の西側で、001と003の甕がともに口縁を西に向かって横位で潰れたような状態で検出された。

いずれも日常土器であり、棺としての原位置にあるとは見なし難く、甕棺墓であるかも即断できないような出土状況であった。埋土を全て回収し乾燥フライ法で微細遺物の抽出を行ったところ、18mm以下の人骨とみられる骨片を少量検出した。よって、日常土器を転用した甕棺墓が後世の損壊を受けたものと判断した。

平面プランからみて、2基の甕棺が同時に接するように構築されたと考えられる。おそらくは、東側の墓坑に004・009の壺が合わせ口棺として、西側の墓坑に001・003の甕が合わせ口棺として埋置されていたのであろう。いずれもサイズからみて小児用と考えられる。

損壊時期の推定は難しいが一つの見立てとして中世が挙げられる。4層上半では多量の弥生土器片とともに中世の土師質土器片が多く出土している。この時期に後述の掘立柱建物跡SB03等を含めた土地利用・改変があり、弥生時代の遺構群が損壊を受けた可能性がある。ただ、ST04内には弥生時

代中期後葉以降の土器は出土しておらず、
損壊は中世以前の甕棺墓構築に近い時期
である可能性も否定できない。

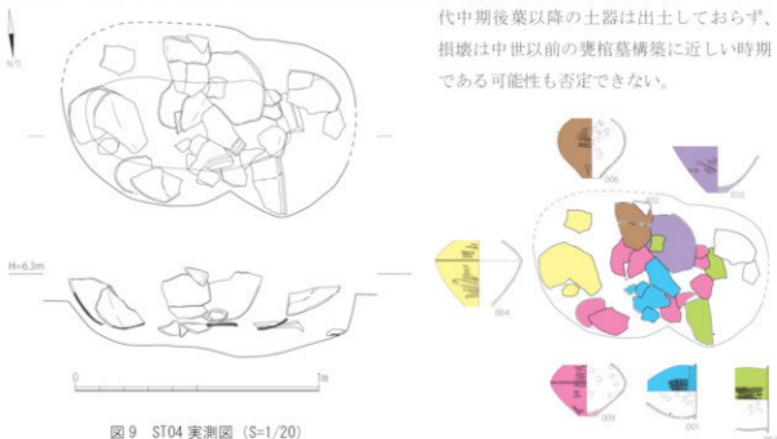


図9 ST04 実測図 (S=1/20)

004は城ノ越式から須玖Ⅰ式古段階に相当する壺で、底部から頸部までの復元高は30cm程度・胴部最大径は推定で34cm程度の中型である。底部付近までは残るが底部はない。全体的に風化しているものの部分的に横方向のヘラミガキが認められる。特徴的な点として胴部最大径に施された沈線がある。突帯を貼り付ける際のアタリとも考えられたが、突帯の剥離した痕跡は全く認められない。類例は見受けられないが、装飾として施されたものであろう。

009も城ノ越式から須玖Ⅰ式古段階の壺で、底部から頸部までの高さは22cm程度・胴部最大径31cmの中型である。明瞭な穿孔痕跡とは認めづらいが底部を1/2ほど残し直径8cmほどの欠損がある。全体的に横方向のヘラミガキが施されており若干の光沢感がある。004よりも寸詰まりで底部から胴部の開きが大きい。

001は城ノ越式の甕で、口縁部径は22.7cm・胴部最大径は21.8cmの小型である。口縁部の内外面に頸部と口縁部を合わせ作りした際の接合痕が線状に残る。003は須玖Ⅰ式古段階の甕で、口縁部径は27.4cm・胴部最大径は26.0cmの中型である。その他、006の壺胴部片や010の壺底部・005の甕底部等が出土している。

石器では、墓坑内で台石及び礫石(401・412及び402)並びに安山岩及び黒曜石製の石器剥片(403・404及び407・408)が出土している。石器剥片は上位のSU06や後述のSU01~03の内部でも目立って出土しており、なかには409の石鏃もある。台石・礫石は甕棺墓に伴っていた可能性もあるが、いずれにしろこれら石器は弥生時代中期の生活層に伴っていた可能性があり当該期の石器として注意を要する。

(2) 焼土を伴う遺構 (S L)

① SL01

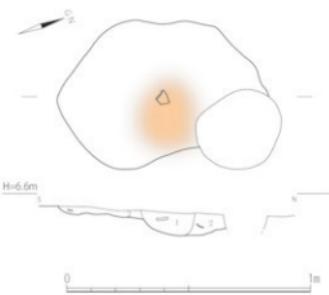
調査区南半に位置する。4層掘削中に検出された。土器片集中部SU04と重なっておりSP107に切られる。SL01・02と比べ平面プランは不明瞭で、長軸約86cm・幅約60cmの範囲に焼土が疎らに混じる。中央付近には掘り込み状の焼土密集部が認められ、径24cm・深さ8cmを測る。埋土中では少量の弥生土器片が出土しており、弥生時代中期のSU04と重なることからも同時期の遺構と考えられる。

(3) 土器集中 (S U)

弥生時代中期の土器片の集中する箇所が認められた。土器片は多量ではないがそれぞれ数個体分があつたものとみられる。

① SU01~03

調査区北東半に位置し、4層削平面で検出された。SU01の016・022甕口縁部は甕棺墓ST04と接合する。先述したようにST04とは3mほど離れており、ST04が損壊された際に動かされたものと考えられる。甕や壺の口縁部片があり、城ノ越式から須玖Ⅰ式におさまる。



SL03 土層
1層 被熱強い、焼土が多く混じる。土器片を含む。
2層 焼土粒の混じり硬化している。土器片が混じる。

図10 SL03 実測図 (S=1/20)

② S U O 4

調査区中央に位置し、4層中で検出された。SP106・107に切られる。城ノ越式や須玖I式にあたる甕の破片028・029等が出土した。台石状の435は明確な使用痕は認められないが、土器片や焼土を伴うSL03との関連性を窺わせる出土状況であった。竪穴建物跡の炉跡等の可能性も考えられたが、柱穴として認定できるようなピットは確認できなかった。

2. 遺物

(1) 石器

1～4は石鎚である。1は幅広の凹基で基部の抉りは明瞭で、薄手の精巧な作りである。脚部の丸まる特徴があり、早期の押型文土器に伴うものであろう。淀姫系黒曜石を素材とする。2は浅い凹基の石鎚で先端と左脚部を折損する。素材となる石材は安山岩である。3も浅い凹基の石鎚で、先端と右脚部を折損する。胴下半部より先端部が薄く作られている。石材は白い粒子を僅かに含む良質の黒曜石である。4は幅広で浅い凹基の石鎚である。先端と両脚部を折損する。安山岩を素材とするが薄手に仕上げられているものの調整はやや粗い。5は分厚い剥片を素材とする両面加工石器である。一部に縦面を残し、上下両端から剝離が入っており楔形石器の可能性もある。良質の漆黒色の腰岳系黒曜石を素材とする。6は厚手の剥片の上端を打面として両面に細石刃様の剝離を施した石器である。一部に平坦な縦面を残す。素材は漆黒色の良質な腰岳系黒曜石である。7は厚手の剥片を素材とする両面に加工を施した石器である。正面には求心的な調整剝離が認められるが刃部を意識したものではない。背面にはヒンジフラクチャ一状の大きな剝離が看取される。背面には一部に縦面を残す。安山岩を素材とする。8は横剥ぎの幅広の剥片を使用した石器で背面に使用痕のある剥片である。安山岩を素材とする。9は縦面を打面とする縦長の剥片である。側縁の一部に使用痕のある剥片で、良質の腰岳系黒曜石を素材とする。10は打点部を折損するやや幅広の縦長剥片である。器体下部に調整加工を施した加工痕のある剥片である。ガラスの質感に乏しい針尾Ⅲ群の黒曜石を素材とする。11は分厚い縦長の剥片である。腰岳系黒曜石を素材とする。12は縦面を打点とする横長剥片である。安山岩を素材とする。13は幅広の不定形な分厚な剥片である。縦面を一部に残している。素材は良質なガラス質に富む腰岳系黒曜石である。14は13と同様の不定形剥片である。白い粒子を若干含む13より質的に劣る腰岳系黒曜石を素材とする。15は縦面を大きく残した不定形剥片である。良質の腰岳系黒曜石を素材とする。16は亜角縦の原石を素材とする石核様の石器である。石質は白粒子を多く含むもので劣悪である。素材の原産地は腰岳系である。17は安山岩を素材とする石核様の石器である。側面の一つが縦面で構成される。二重バティナが看取される。

黒曜石の原産地について、1・6・9～11・13・14・16は螢光X線分析による判別に基づいている。401・402は甕棺墓ST04の内部で出土した台石・敲石である。401は扁平な流紋岩の板石で直角三角形状を呈し最長部で12cm弱を測る。短辺寄りの両面に径2cm程度の敲打による窪みが認められる。また直角部の両面は被熱により赤化している。402はやや厚みのある流紋岩で直角三角形状を呈し最長部で12.4cmを測る。直角部から短辺にかけて打ち欠きが認められる。412は砂岩の板石で径5cm程度の敲打痕がある。



図 11 遺物実測図 [縄文・弥生時代石器] (S=2/3)

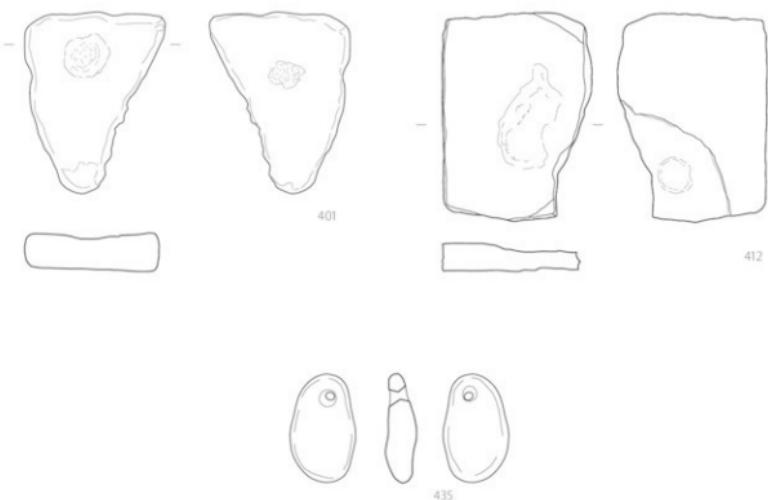


図12 遺物実測図〔弥生時代石器〕(S=1/3、435のみS=1/1)

(2) 土器

包含層や後世の遺構等で多くの弥生土器片が出土している。弥生時代中期初頭から中期後葉にかけての時期におさまる。いずれも北部九州系であり目立った地域色は認められない。城ノ越式から須玖II式古段階に相当し、量的には須玖I式古段階にピークがある。

型式的な傾向が掴みやすい甌をみると、口縁部が断面三角形あるいは台形を呈するもの（032・033・187等）や、底部が厚い脚台状を呈し中空ないし上底状であるもの（216・210・067・056等）が城ノ越式に相当する。口縁部の外面突出がやや伸びはじめるもの（052・211・044・190等）が須玖I式古段階に、口縁部の外面突出が大きく伸び、内面突出が目立ちはじめるもの（194・189等）が須玖I式新段階にあたる。口縁部が下向きになり内面突出が大きいもの（191・193・224等）が須玖II式古段階にあたる。底部では平底のものがあるが（069・066）、須玖I式古段階に特徴的な若干上底状を呈するものが多い。ほかに少数の広口甌や鋤先口縁甌の口縁部（023・053・202・230等）・高坏坏部（275）も出土している。

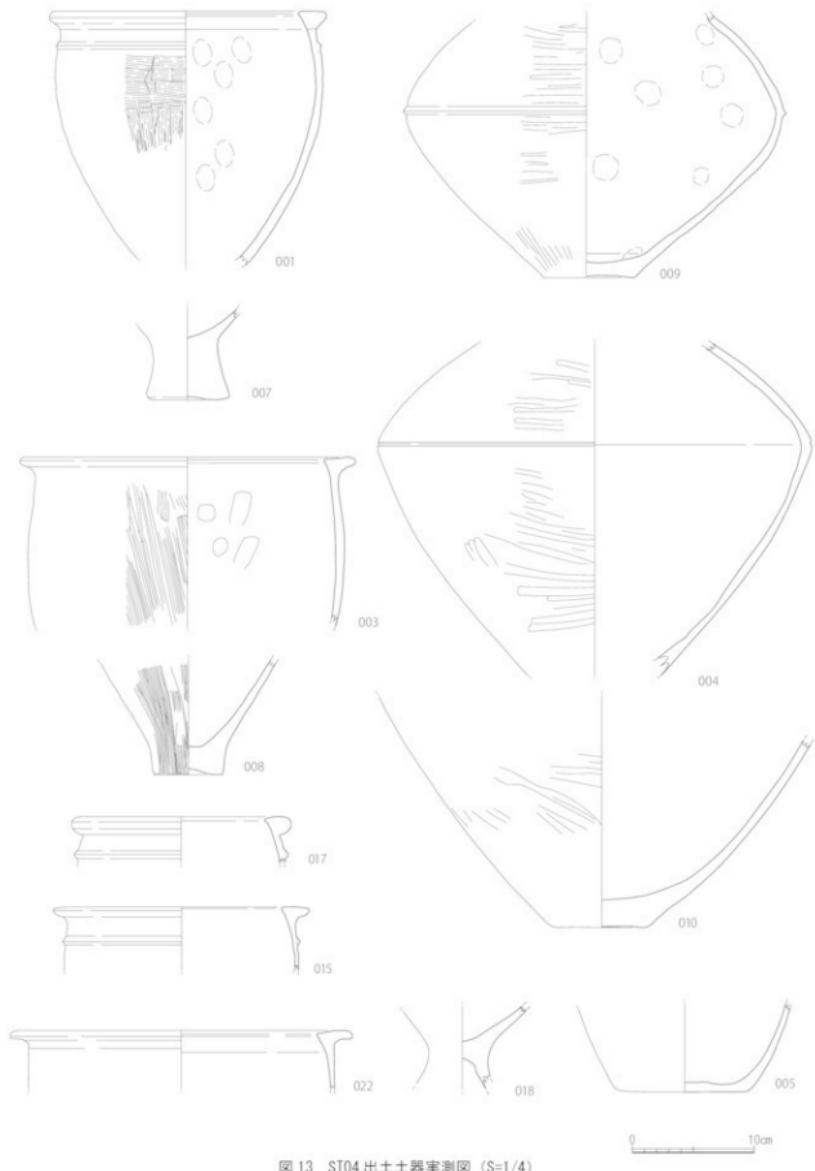


図 13 ST04 出土土器実測図 ($S=1/4$)

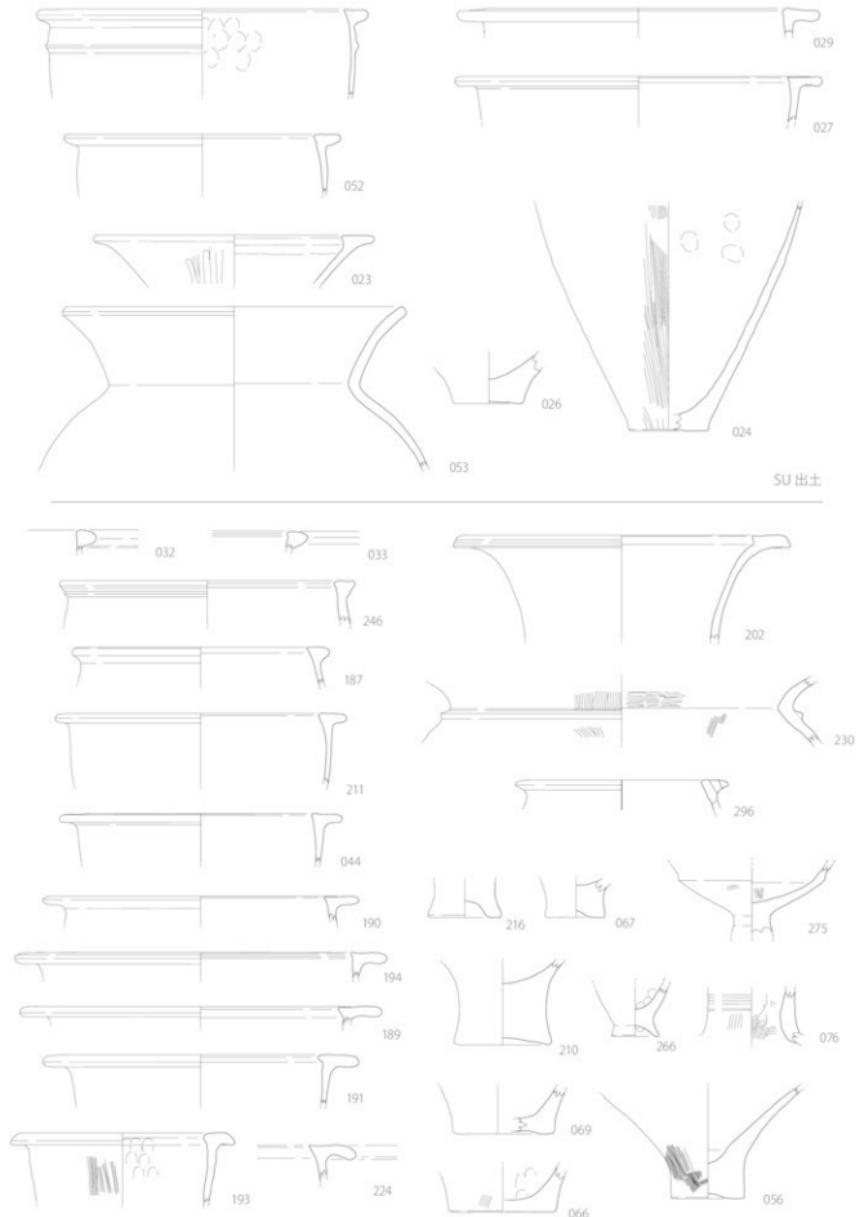


図14 遺構・包含層出土遺物実測図〔弥生土器〕(S=1/4)

V. 古墳時代の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 土器埋設ピット

① SP81

調査区南西隅に位置しSP218と近接する。6層削平面で検出された。ピットの平面プランは円形で、長軸34cm・短軸31cm・深さ9cmを測る。ピットの内部では壺の破片と礫が出土しており、壺口縁部片045はSP218出土の破片と接合した。後世の削平時に損壊を受けたとみられ、壺の残存は悪く完形に復元できない。壺045は口縁部が直線的で端部は丸みを帯び、内面にヨコハケが施されている。

② SP218

調査区南西隅に位置しSP81と近接する。6層削平面で検出された。ピットの平面プランは円形で、長軸45cm・短軸41cm・深さ36cmを測る。ピットの内部には壺049が倒置状態で据え置かれたような状態で出土している。SP81と同様に後世の削平時に損壊したとみられ、胴部以下の一部は残るが完形に復元できない。この壺以外に壺口縁部片046～048が出土している。

壺049の口縁部は直線的で上部がわずかに内湾する。端部内側がやや摘み上げられているが面取りはなされず丸みを帯びる。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ、胴部外面は短めのタテハケが施される。壺046～047も壺049と同様で、口縁部が直立するか僅かに内湾し端部は丸みを帯びる。いずれも器壁は厚手で胎土は粗い。肥前地域編年の2B期(TK73併行期)前後にあたる(小松2002)。遺構の年代として古墳時代中期前葉が考えられる。SP81・218ともに遺構の残存状態が悪いこともあり性格は不明だが、何らかを意図した土器埋設設である可能性を想定しておく。

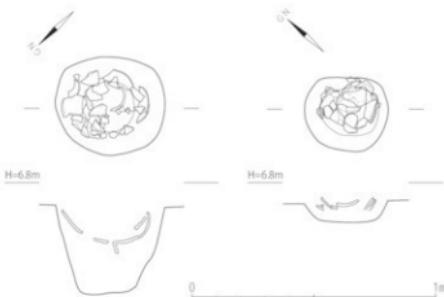


図15 SP81-218 実測図 (S=1/20)

2. 遺物

(1) 土師器

① 古式土師器 (庄内系碗形高坏、庄内・布留系壺)

166は庄内系碗形高坏で脚据部は短く口縁部径をやや上回る程度である。126は土師器壺の口縁部片で上端部がやや内湾し端部内側は面取りされやや摘み上げられている。頸部内面は稜をなさず若干の面をもつ。172は土師器壺の口縁部片で端部は面取りされず内側にやや摘み上げられ外側に若干肥厚する。壺はいずれも肩部以下が残存せず、全体的な形態や調整等の技法が不明であるため系統には言及できないが、いずれも古墳時代初頭～前期中葉の所産と考えられる。

② 土師器

167・168の壺は口縁部から肩部にかけての破片で口縁部は大きく外反し肩部はなで肩状を呈する。口縁端部は丸みを帯びるが167は薄く仕上げられている。肥前地域編年の4(B)期(TK47併行期)頃

にあたり（小松 2002）、古墳時代中期後葉の所産と考えられる。205 は口縁部を欠く小型の壺である。体部は球形を呈するが器壁は厚手で器面の凹凸が目立つ。体部外面には長いタテハケが施される。

(2) 須恵器

297 は坪蓋片で天井部と口縁端部を欠く。推定口径が 16cm 程度で天井部には回転ケズリは施されない。口縁部との境は明瞭な稜をなす。TK43 型式前後にあたり古墳時代後期後葉の所産と考えられる。285 は坏身受部の小片で返りはごく短い。TK43～209 型式にあたり古墳時代後期後葉の所産と考えられる。



図 16 SP81・218 及び遺構・包含層出土遺物実測図 [古墳時代土器] (S=1/4)

VI. 古代・中世の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 挖立柱建物跡 (S B)

① S B O 3 挖立柱建物跡

位置・規模 調査区北半に位置する。4層削平面で検出された。確認できた建物規模は東西5間×南北3間以上、南辺の柱穴列は東西を指向し、母屋部分の南辺に底がつく構造と考えられる。柱穴は平面プランが円形で直径47～62cm・深さ43～140cmを測る。ほとんどの柱穴は直径で50～60cm・深さで40～80cmに納まる。調査区外の北側に続くようであったため調査範囲を拡張したが、建物跡の北辺は確認できず、南北規模は3間以上の可能性が高い。

柱穴間の芯々距離は、母屋部分ではSP233・SP150・SP159間で239・245cm、SP01・SP11・SP20間で227・198cm、SP159・SP137・SP226・SP225（-SP22）間で203・195・204（+202）cm、SP225・SP63・SP22・SP20間で108・90・110cmを測る。柱間寸法として110cm程度・200cm程度・240cm程度の3種が採られたと考えられる。

柱穴概観 各柱穴の法量・柱痕跡の有無・埋土類型等の基本的な観察事項は一覧に記載することとし（表3～6）、ここでは礎板石及び柱穴や柱痕跡内での遺物等の様相について述べる。

多くの柱穴において30～40cm長で平坦面を持つ割石や亜円礎が出土しており、柱を支える礎板石として用いられていたものと考えられる。これら礎板石の上面はSP01・150などでは水平をなすが、SP11・159・137・225・22などでは斜めや縦方向に傾いている。またその出土位置は、柱穴の底面ではなく底面近くや中位以上にあるものが多い。一方で、SP22・225など柱穴底面に柱当たり痕跡の認められるものが幾つかあった。SP22では柱穴底面には深さ10cmほどの柱当たりが認められながら、その40cmほどで礎板石が出土している。斜めや縦方向の礎板石がみられることや、柱当たりを有しながらその上部に礎板石状の礎がみられることを考え合わせると、礎板石を用いない立柱工法から礎板石を用いる工法での建て替えや、最終的な柱抜き取りが行われた可能性が想定できる。

柱穴内での遺物では弥生土器小片が比較的多く出土している。次いで、建物の時期となる15世紀を中心とした中世の土師質土器片多数（099・125等）と土師器・須恵器、瓦質土器（105）・陶器（109）・天目碗（101）等の破片や掛仏とみられる銅製仏像が出土した。これらの中で、SP225出土の陶器片（109）はSP226出土の破片と接合している。

(2) ピット群 (S P)

調査区全体で多数のピットを検出しており分布密度は高いが、建物跡と認定できるような配置は認め難い。例えば南西半1グリッドに位置するSP26・56・53・49やSP36・34・58・66は列をなしており、芯々距離はそれぞれ120～160cm、90～110cm程度と同程度の間隔で並ぶ。しかし周辺のピット群をみても建物跡として認定できるような配置は認められない。それでも、柱痕跡や柱当たり・礎板石状の礎を有するなど、柱穴としての特徴を持つピットが幾らか認められており、何らかの構造物を構成していたものと考えられる。例えば、SP03は柱痕跡を有し内部で黒色土器底部片127が出土している。周辺では黒色土器213が礎とともに出土している。これらはSB03より以前の古代の柱穴である可能性がある。

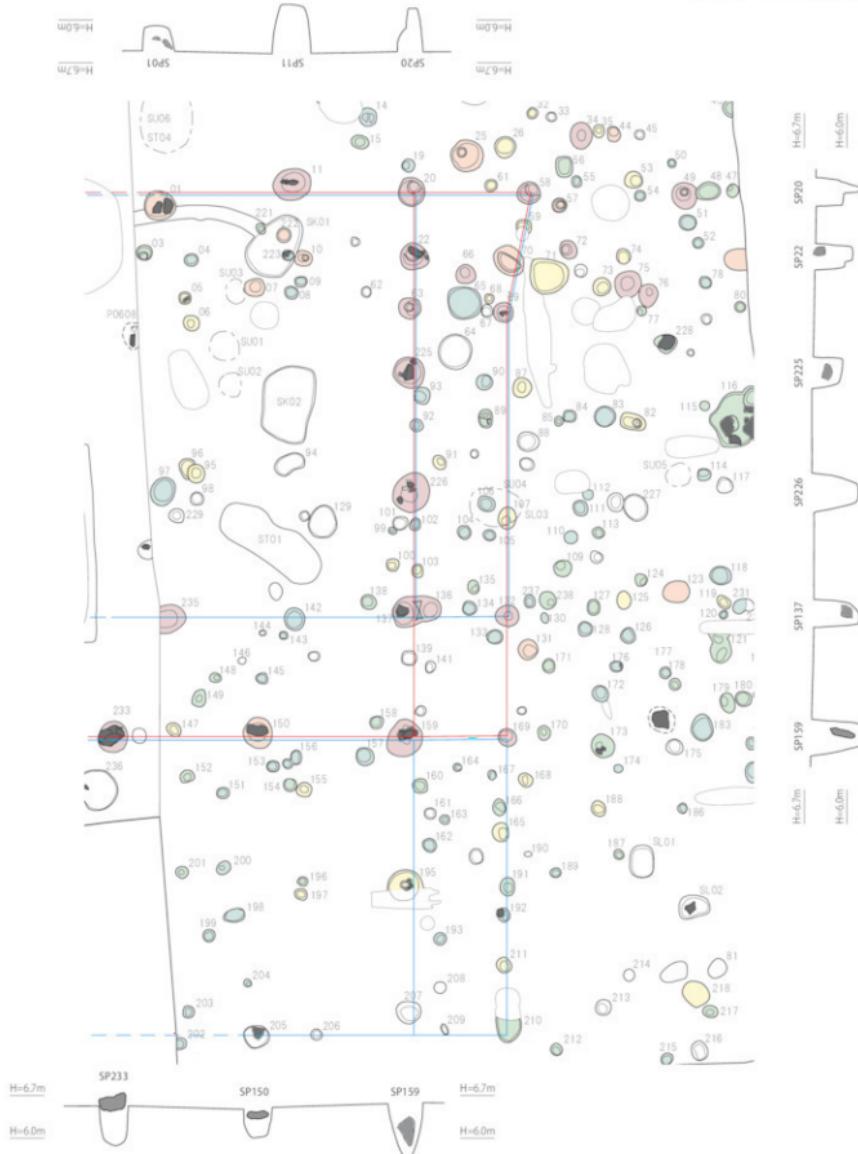


図 17 SB03 実測図 (S=1/80)

遺構番号のうちピットのSPは省略している。また、ピットは深さ毎に色分けしている。
 ○：10cm～20cm未満、●：20cm～30cm未満、■：30cm～40cm未満、○：40cm～50cm未満、●：50cm以上。
 朱線：SB03、青線：建物認定の別案

また、SP142・235・207、根固め石状の礫を含むSP195、礎盤石状の礫を有するSP205などは、SB03の東西軸や柱穴配置に近い位置にあり、SB03を構成する柱穴であった可能性もある。一方で建物跡の見方を変えると、SB03の西辺はSP136・142・235のラインで終わり、SP233・150・159・195・207・205ほかで構成される別の建物跡を抽出する案も否定できない。

ほか、SP36・58・66では柱痕跡及び柱当たりが確認されており柱穴であった可能性が高い。SP117では柱穴内全体に炭化物が検出されている。

(3) 葬送関連遺構（ST）

① ST01

調査区北半に位置しSP224に切られる。4層削平面で検出された。平面プランは楕円形で長軸187cm・幅71cm・深さ11cmを測り、中央付近が幅58cmとやや狭まる。掘方の四隅に20～30cm長の円礫・亜円礫がほぼ水平に配置されており、それぞれの礫の上面レベルは4～5cmの差がある。これら「棺台石」とみられる礫はⁱ、特に南側2点の外側（掘方の立ち上がり側）がやや赤化しており被熱した可能性が考えられる。

遺物は埋土中で弥生土器・土師器・土師質土器の細片が多く出土した。土師質土器は細片のみで詳細な時期は特定できないが中世のものであろう。また、木棺墓等の埋葬遺構である可能性を考え、埋土を回収し乾燥フライ法で微細遺物の抽出を行った。その結果、5mm程度の骨片1点を検出したが、木棺が存在した傍証となる釘等は検出できなかった。そのほか検出面では、ST01を切るSP224内で須恵器短頸壺片057が1点出土している。

遺構の性格として類似遺構をみると、埋葬施設である「木棺墓・土坑墓」、あるいは埋葬施設ではなく火葬を行う施設である「火葬土坑」とされている。副葬品や木棺の釘等が検出される場合は墓とみなされることが多い。一方、火葬土坑の場合は土坑底面・壁面の被熱痕跡や底面に残る焼土・灰・炭化物等が傍証となるものの、これらが認められない場合もあり火葬土坑の必要条件とはなっていない（中間1991、狭川1999など）。

ST01では微細な骨片を検出したものの埋葬遺構あるいは火葬土坑である確証は得られていない。被熱痕跡のある棺台石から考えて「火葬土坑」である可能性を挙げておく。

(4) 土坑（SK）

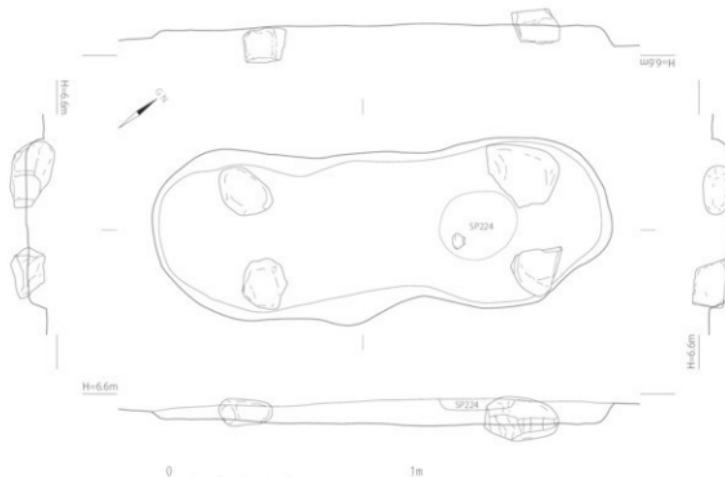
① SK02

調査区北東半に位置しST01に近接する。4層削平面で検出された。平面プランは隅丸の不定台形で長軸125cm・幅86cm・深さ13cmを測る。底面付近で炭化物・焼土を多く含む層を検出した。層厚は数cm程度で底面に広く堆積していた。その下の掘方底面は被熱によりやや赤化・硬化している。埋土中の遺物では、土師質土器の小片や多量の弥生土器・土師器・土師質土器の細片が出土した。また、5mm程度の骨片1点が出土しており、ST01と同様の葬送関連遺構である可能性がある。

② SK03（旧SP116）

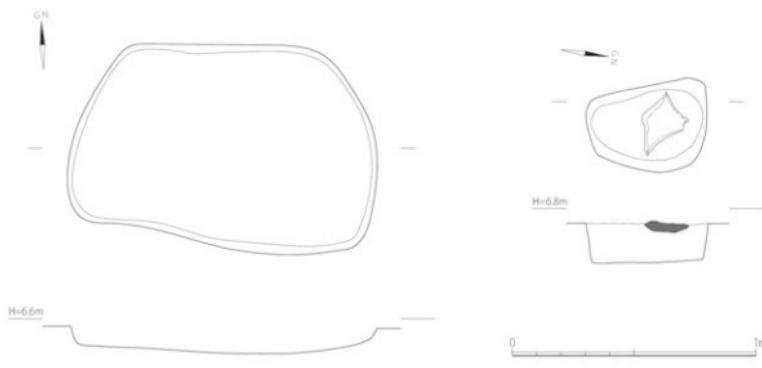
調査区南端に位置する。4層削平面で検出された。調査区境界の外側に伸びているため詳細な形状や規模は不明だが、確認できた部分での平面プランは不定形で長さ90cm以上・深さ22cmを測る。また埋土には炭化物・焼土が多く確認でき、炭化材1点について放射性炭素年代測定を行ったところ、

i 秀島貞康氏のご教示による。



ST01
黒褐色極細砂質シルト土 (10YR2/3) しまりやや強い。粘性やや強い。土器細片を1%未満含む。

図18 ST01 実測図 (S=1/20)



SK02
暗褐色極細砂質シルト土 (10YR3/4) しまりやや強い。粘性やや強い。土器細片を1%未満含む。径5~20mmの小礫を1%未満含む。底面付近は炭化物が多い。

SL02
黒褐色細粒砂 (7.5YR3/2) しまり強い。3cm未満の塊土ブロックを1割未満含む。炭化物を含む。

図19 SK02・SL02 実測図 (S=1/20)

13世紀後半から14世紀後半の曆年代が推定されている（分析は第VII章）。埋土中の遺物は、土師質土器で糸切底の142のほか、少量の弥生土器・土師器・土師質土器の小片が出土した。142の年代として14世紀後葉から15世紀前葉が考えられ、放射性炭素年代測定の結果と合致する。埋土中から底面付近で40・60cm長の比較的扁平な円錐2点を検出している。うち1点の下からは別のピットが検出された。遺構の全体が把握できないこともあり性格は不明である。

（5）焼土を伴う遺構（S L）

① SLO2

調査区南西方に位置する。6層削平面で検出された。平面プランは梢円形で長軸50cm・幅36cm・深さ14cmを測る。掘方の北寄りに20cm長の扁平な角鍤が検出された。掘方底面より12cmほど浮いているが、平坦に据えられたような状態にある。掘方の南側縁辺に焼土ブロックが多く認められた。埋土中では弥生土器・土師器・土師質土器の小片が比較的多く出土している。

2. 遺物

（1）黒色土器

古代の黒色土器碗の底部片が5点出土している。内訳は内黒（A類）が2点、両黒（B類）が3点である。いずれも底部のみで体部から口縁部を欠いている。高台径は小さく低く、断面形は台形状で面を持ち貼付部に抉りの入るタイプ（内黒127・両黒300）と、舌状の丸みを帯びるタイプ（内黒213）、直立し内外面に抉りの入るタイプ（両黒203）がある。細かな型式は不明であるが、高台径の縮小や203を除きミガキの施されない粗雑化の傾向が読み取れることから、10世紀後半～11世紀の年代を想定しておく。

（2）土師質土器

SB03やその他のピット、包含層でも多量の土師質土器片が出土しているが、完形品はなくほとんどが小片である。小皿に着目すると、器高の低いタイプ（301・083等）もある中で、体部が立ち気味のタイプ（080・081・082等）や器高の高いタイプ（111・142・183等）が多く見受けられる。いずれも底径は小さく、年代的には14世紀以降、中でも15世紀前後が中心と考えられる。

（3）瓦質土器

掘立柱建物跡SB03・SP226では瓦質土器の火鉢口縁部片が出土している（105）。口縁は直立し端部外面がやや突出する。外面の端部から2cmほど下には1条の三角突帯が廻っている。突出と突帯の間には菊花文のスタンプが施される。スタンプは陽刻で長三角形の花弁16枚を直径1.3cmの円形に配置し表現されている。突帯の下には薺研磨状の縦条線が刻まれている。破片のため器形や文様の全容は不明だが、豊前地域の深鉢形C類に相当し、15・16世紀の所産と考えられる。ほか、SP26で釜の胴部片130が出土しSP70出土のものと接合している。

（4）その他

ST01を切るSP224では須恵器の短頸壺片057や环蓋の小片078も出土している。057は8世紀代、078は8世紀後葉の所産と考えられる。また、小片ではあるが綠釉陶器片245が4層で出土している。ほかに貿易陶磁器の小片があり、鎬の緩くなる鎬蓮弁青磁碗III類の口縁小片122や雷文帯のある244等が出土している。それぞれ13世紀中葉から14世紀初頭、15世紀前半頃の所産である。

SB03 - SP01 の検出面縁辺では銅製仏像が出土した。台座を含めた高さは 4.49cm・幅 1.48cm・厚み 0.58cm・重量 10.1g を測る。全体的に摩滅したようで詳細な形状は不明だが、フォルムや両裾に垂らした天衣等からみて觀音菩薩立像と考えられる。顔や両胸にあたる部分の形状は不明だが腕は欠損した可能性がある。両脚は真ん中を縦に窪ませて表現されており、梢円状の隙間を空け天衣が垂れている。背面は全体的に平坦で首と肩の境を窪ませてある程度だが、左肩から右腰にかけて条帛を表現したとおぼしき 3 条の沈線が施されている。表には右肩から左腰に向か 2 条の沈線が見えるが条帛とは対応しない。摩滅や欠損により本来の造形は判然としないが、背面の平坦さからみて懸仏の一部であったと考えられる。

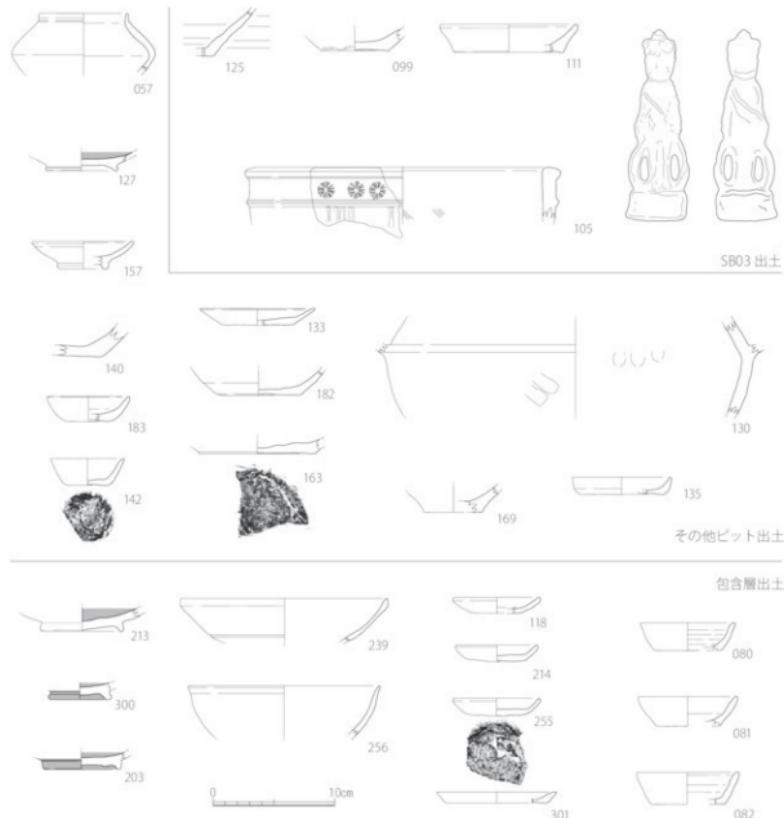


図 20 SB03・その他ビット・遺構・包含層出土遺物実測図〔古代・中世土器〕(S=1/4)

VIII. その他の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 土坑

① SK01

調査区北東半に位置し、先述の中世土坑 SK02 に近接する。平面プランは卵状の楕円形で長軸 112cm・最大幅 76cm・深さ 6cm を測る。溝状の遺構に連なっており切り合い関係は認められなかった。溝状の部分は SP221 を切っている。遺物の出土はなく遺構の年代や性格は不明である。近接する遺構の中世 ST01 や SK02 との関連が想起される。

② SCO1

調査区北側の拡張部際に位置し調査区外に続く。4 層削平面で検出された。南辺の平面形は隅部が直角をなす方形で 3.2m を測る。埋土は 3 層よりも砂質・灰色味が強い。底面は全体的に平坦で下端は丸みを帯びる。出土遺物は土師質土器 118 や貿易陶磁器 122・123などの小片が混じるが、近世以降の陶器片などが多い。当初は地下室坑等の遺構である可能性を想定していたが、底面の造作等は特に認められなかった。

③ 廃棄土坑

その他、明治期の学校用地造成時のゴミ穴とみられる廃棄土坑もあった。土坑の壁面沿いには礫が多く、埋土中では植木鉢や印判手・二彩手の陶磁器等が出土した (277・279・280 等)。

(2) 焼土を伴う遺構 (SL)

① SLO1

調査区南西半に位置し SL02 や土器埋設ピット SP81・218 と近接する。6 層削平面で検出された。平面略円形・径 70cm 程度のピット 2 基が切り合う格好となっており、深さは 8~12cm を測る。切るピット SL01a の背面側に焼土が多く認められ、SL01b を切る側は 6 層由来の褐色土ブロックを含む土層となっている。切られる SL01b は背面側が被熱し顎著に赤化しており、検出面では焼土の輪郭として明

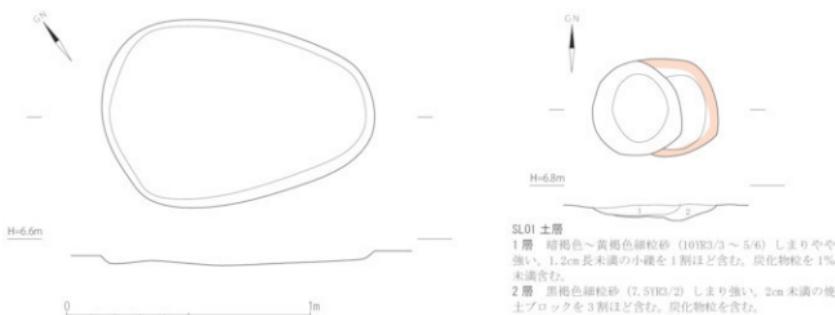


図 21 SK01・SLO1 実測図 (\$=1/20)

瞭に認識できる。この輪郭状の焼土はSL02の検出状況と似る。どちらの埋土も焼土ブロック・炭化物粒を多く含み、底面は被熱により赤化している。焼土の分布からみて、浅いピットを燃焼部とし抜き出しを行うような使用方法が想起される。埋土中では少量の弥生土器・土師器小片が出土している。遺構の年代は推定しづらく、位置や遺物からは古墳時代が考えられるものの、焼土を伴う遺構として近接するSL02との関連が考えられ、中世の遺構である可能性を挙げておきたい。

2. 遺物

SC01や包含層で近世以降とみられる遺物が出土している。弥生土器等の土器片の他、不明石器や火打石、土錐やキセル片等があった。

① 小型柱状片刃石斧か

SC01で出土した481は粘板岩製で長さ1.9cm・幅0.9cmの方柱状を呈し、上面及び3側面は研磨されているが1側面は未研磨あるいは破断し、下面は折損したとみられる。弥生時代の小型柱状片刃石斧（ノミ形石斧）の欠損品とも考えたが器種は不明である。

② 火打石

SC01や包含層で火打石と思しき石英片が出土している（456・462・480等）。480は長さ2.9cmの方柱状を呈し2面に縦面を残す。長辺2辺の稜が丸く摩滅している。石材は乳白色で透明感はない。456は長さ2.2cmの三角柱状を呈し3辺とも摩滅している。480に比べ若干の透明感がある。その他、ST01でも1.5cm長の石英片が出土しており、縁辺は摩滅で丸みを帯びている。

③ 三島唐津

拡張区東半の廃棄土坑近くで武雄系の三島唐津皿が出土している（263）。口縁部は溝縁を呈し推定径は27.5cm・器高7.6cm・高台径10.5cmを測る。内面は4種の印花文による象嵌が施され、外面の体部から高台にかけては無釉である。17世紀前半の所産であろう。

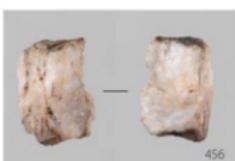


写真 11 その他の遺物

表3 ピット一覧1

番号	グリッド	法量(cm)	柱穴属性	遺物	備考
		直徑 深さ	埋土 柱底 柱面 壁板石		
SP01	北東平1	47 43	B	● 弥生・土師器・土師質・銅製仏像	SB03構成ピット
SP11	北東平1	62 89	Ac(B)	● 弥生・土師質	SB03構成ピット
SP20	北東平1	48 71	A(Ab)	● ● 弥生・土師質	SB03構成ピット
SP22	北東平1	47 61	Ab	● ●	SB03構成ピット
SP63	北東平1	35 57	A(AB)	● ● 弥生・土師器・土師質・天目	SB03構成ピット
SP136	北西平1	40 62	B	弥生・土師質	SB03構成ピット
SP137	北西平1	55 74	A(Ab)	● ● ● 瓦張】内黒土器片・柱穴】土師質小皿片。 弥生・土師質	SB03構成ピット
SP150	北西平1	51 49	A	● ● 弥生・土師質	SB03構成ピット
SP159	北西平1	62 83	B(A)	● ●	SB03構成ピット
SP225	北東平2	56 52	A(Ab)	● ● ● 弥生・土師質多量	SB03構成ピット
SP226	北東平2	61 73	A(Ab)	● ● ● 瓦質火鉢・陶器。弥生・土師質多量	SB03構成ピット
SP233	拡張西平	55 65		● 弥生・土師器・土師質多量	SB03構成ピット
SP26	南東平1	34 32	A	弥生・土師質・瓦質羽釜・青磁	SB03構成ピット(底部) 瓦質羽釜はSP70と接合
SP69	南東平1	32 61	A(Ab)	● 弥生・土師質	SB03構成ピット(底部)
SP70	南東平1	55 51	Ab	弥生・土師器・瓦質羽釜・土師質	瓦質羽釜はSP26と接合
SP107	南東平2	37 31		● 弥生・土師器	SB03構成ピット(底部)
SP132	南西平1	39 51	B	弥生・土師器・土師質	SB03構成ピット(底部)
SP165	南西平2	31 33	A	弥生・土師質・瓦質	SB03構成ピット(底部)
SP166	南西平2	28 26	A	弥生・土師器	SB03構成ピット(底部)
SP169	南西平1	31 54	B	弥生・土師器	SB03構成ピット(底部)
SP02	北東平1	0		土師質	
SP03	北東平1	25 24	A	● 弥生・土師器・須恵・兩面・内里	
SP04	北東平1	23 14	A	弥生・土師質	
SP05	北東平1	20 36	A	弥生	
SP06	北東平2	26 37	A	弥生・土師質	
SP07	北東平1	33 48	A	弥生	
SP08	北東平1	22 14	B	弥生	
SP09	北東平1	20 19	B	弥生	
SP10	北東平1	30 46	A	弥生・土師質	
SP12	北東平1	0 D		弥生	
SP13	北東平1	80 5	Ac	弥生・土師器・土師質	
SP14	北東平1	31 19	A	弥生・土師質	
SP15	北東平1	28 25	A	弥生	
SP16	北東平1	24 40	C		
SP17	北東平1	16 22	A	弥生・土師質	
SP18	北東平1	15 12	A		
SP19	北東平1	21 19	A	土師質	
SP21	北東平1	24 30	A		
SP23	南東平1	80 10		弥生・土師質	
SP24	南東平1	0 B		弥生・土師質	
SP25	南東平1	52 42	Ac(B)		
SP27	南東平1	36 33	A	弥生・土師質	
SP28	南東平1	0 A		土師質	
SP29	南東平1	16 17	A	弥生・土師質	
SP30	南東平1	35 44	A(AB)	● 弥生	
SP31	南東平1	22 12	B	弥生・土師質	

【埋土類型】

A類 黒褐色(7.5YR2/2)、しまりやや弱い、粘性強い。土器細片等の褐色粒を含む。4層由来の土がベースで4層に比べ色調が暗い。

5層由来のこれなれた褐色土ブロック(径1cm未満)を含む。

B類 暗褐色細砂質シルト土(10YR3/3~3/4)。しまりやや弱い~強い、粘性やや弱い。B類に近い。

C類 黄褐色(10YR4/4)。近現代の現象。

D類 黄褐色の土質シルト土(2.5Y5/5~6/7)。粘性強い~非常に強い。

E類 ブラック土が多く混ざる。

F類 腐化物が多く混じる。

表4 ピット一覧2

番号	グリッド	法量(cm)			柱穴属性	遺物	備考
		直徑	深さ	埋土			
SP32	南東平1	19	30	A			
SP33	南東平1	16	9	A			
SP34	南東平1	44	56	B		弥生・土師器・土師質	
SP35	南東平1	21	33	A		弥生・土師質	
SP36	南東平1	32	49	A	●		
SP37	南東平1	0	C				
SP38	南東平1	22	5			弥生・土師質・瓦質	
SP39	南東平1	22	26	A			
SP40	南東平1	25	26	A		弥生・土師質	
SP41	南東平1	22	27	A			
SP42	南東平1	19	11	C			
SP43	南東平1	37	20	A		土師質	
SP44	南東平1	25	40	A		弥生	
SP45	南東平1	17	9	B			
SP46	南東平1	30	28	A		弥生	
SP47	南東平1	23	26	B			
SP48	南東平1	42	20	A		弥生・土師質	
SP49	南東平1	43	72	B	●	●	弥生
SP50	南東平1	15	16	A			弥生・土師質・両
SP51	南東平1	28	11	Ac			
SP52	南東平1	18	15	A		弥生・土師器・土師質	
SP53	南東平1	30	34	A		弥生・土師質	
SP54	南東平1	19	18	B			
SP55	南東平1	20	13	A		土師質	
SP56	南東平1	25	29	A		弥生・土師質	
SP57	南東平1	23	45	A		弥生・土師質	
SP58	南東平1	37	85	A	●	●	
SP59	南東平1	26	33				
SP60	南東平1	0					
SP61	南東平1	19	38	A		弥生・土師質	
SP62	北東平1	18	3			弥生	
SP64	南東平2	56	8	D		弥生・土師質	
SP65	南東平1	54	11	B		弥生	
SP66	南東平1	33	59	Ac(Ab)	●	弥生・土師質	
SP67	南東平2	22	8	A			
SP68	南東平1	16	36	A		弥生・土師質	
SP71	南東平1	55	38	A		弥生・土師質	
SP72	南東平1	31	52	A	●	弥生・土師質	
SP73	南東平1	30	37	A		弥生・土師質	
SP74	南東平1	25	30	A		弥生・土師質	
SP75	南東平1	43	69	A		弥生・土師質	
SP76	南東平1	39	52	A(AB)	●	弥生・土師質	
SP77	南東平2	16	23	A			
SP78	南東平1	26	13	A		弥生・土師質	
SP79	南東平1	37	44	B		弥生	
SP80	南東平1	18	29	A			
SP81	南西平2	34	9	A		土師器	
SP82	南東平2	41	31	A		弥生・土師質	
SP83	南東平2	34	18	A	●		
SP84	南東平2	22	12	A			
SP85	南東平2	16	25	A			
SP86		0					
SP87	南東平2	33	36	A		弥生・土師質	
SP88	南東平2	36	8	A		弥生	調査時SP88
SP89	南東平2	31	20	A		弥生	
SP90	南東平2	27	13	A		弥生・土師質	
SP91	北東平2	25	32	A			
SP92	北東平2	21	14	A		弥生・土師質	
SP93	北東平2	28	18	A		弥生・土師質	
SP94	北東平2	51	7	A		弥生・土師質	
SP95	北東平2	51	39	B		弥生・土師質	
SP96	北東平2	35	34	A		弥生・土師質	
SP97	北東平2	47	17	A		弥生	
SP98	北東平2	22	6	A			
SP99	北東平2	19	12	A		弥生	
SP100	北西平1	20	30	A		弥生	
SP101	北東平2	26	7	A		弥生・土師器	
SP102	北東平2	22	12	A		弥生・土師質	

表5 ピット一覧3

番号	グリッド	法量(cm)		柱穴属性		遺物	備考
		直径	深さ	埋土	柱底		
SP103	北西平1	23	31	A			
SP104	南東平2	23	18	A		弥生・土師質	
SP105	南東平2	18	19	A		弥生	
SP106	南東平2	27	16	A		弥生・土師質	
SP108	南東平2		0			弥生	
SP109	南西平1	27	26	A		弥生・須恵・土師質	
SP110	南東平2	21	13	A		弥生	
SP111	南東平2	26	12	A		弥生	
SP112	南東平2	16	13	A		弥生	
SP113	南東平2	19	28	A		弥生・土師質	
SP114	南東平2	23	18	A		弥生・土師器	
SP115	南東平2	15	27	A			
SP116	南東平2	91	27			弥生・土師質	
SP117	南東平2	26	8	A			
SP118	南西平1	36	15	B		土師質	
SP119	南西平1	26	32	B(A)		弥生	
SP120	南西平1	14	10	A		弥生	
SP121	南西平1	43	26	Ac		弥生・土師質	
SP122	南西平1		0				
SP123	南西平1	46	41	B	●	弥生・土師器・土師質	
SP124	南西平1	22	20	A		弥生・土師器	
SP125	南西平1	30	35	A			
SP126	南西平1	26	14	B		弥生・土師質	
SP127	南西平1	26	23	B		弥生・土師質	
SP128	南西平1	25	15	A		弥生・土師質	
SP129	北東平2	54	5	B	●	弥生・土師質	
SP130	南西平1	18	13	A			
SP131	南西平1	34	41	A(B)	●	弥生	
SP133	南西平1	26	19	A		弥生・土師質	
SP134	南西平1	24	13	A		弥生・土師質	
SP135	南西平1	23	29	A	●	弥生・土師質	
SP138	北西平1	25	23	B		弥生・土師質	
SP139	北西平1	24	9	A		弥生	
SP140	北西平1		0			弥生	
SP141	北西平1	20	9	A			
SP142	北西平1	36	18	A		弥生・土師質	
SP143	北西平1	13	12	A		弥生・内墨	
SP144	北西平1	10	9	A			
SP145	北西平1	20	16	B			
SP146	北西平1	11	7	A		弥生	
SP147	北西平1	25	33	A		弥生・土師質	
SP148	北西平1	19	26	A			
SP149	北西平1	30	27	A		弥生・土師質	
SP150	北西平1	21	13	A		弥生	
SP152	北西平1	34	27	A		弥生・土師質	
SP153	北西平1	18	15	A			
SP154	北西平1	20	22	A		弥生	
SP155	北西平1	24	32	A		弥生・土師質	
SP156	北西平1	17	13	B			
SP157	北西平1	30	19	B		弥生・須恵・土師質	
SP158	北西平1	20	20	D		弥生	
SP160	北西平1	24	29	A		弥生・土師質	
SP161	北西平2	19	9	A		弥生	
SP162	北西平2	22	15	B		弥生	
SP163	南西平2	16	16	A		弥生	
SP164	南西平1	13	15	A		弥生	
SP167	南西平1	16	12	A			
SP168	南西平1	23	34	A		弥生	
SP170	南西平1	25	24	A		弥生	
SP171	南西平1	23	24			土師質	
SP172	南西平1	28	11	A		弥生・土師質	
SP173	南西平1	38	27	A		弥生・土師質	
SP174	南西平1	15	13	A		弥生	
SP175	南西平1	25	9	A		弥生	
SP176	南西平1	21	12	B			
SP177	南西平1	19	13	A			
SP178	南西平1	20	20	A		弥生	
SP179	南西平1	34	22	B		土師器	

表6 ピット一覧4

番号	グリッド	法量(cm)			柱穴属性		遺物	備考
		直径	深さ	埋土	柱底	柱高		
SP180	南西平1	25	23	A			弥生・土師器・土師質	
SP181	南西平1	22	8	A				
SP182	南西平1	18	6	A				
SP183	南西平1	45	13	A			弥生・土師質	
SP184	南西平1	20	14	A				
SP185	南西平1	36	17	B			弥生	
SP186	南西平2	18	12	A			弥生	
SP187	南西平2	17	24	A			弥生・土師質	
SP188	南西平2	25	31	A			弥生	
SP189	南西平2	16	16	B			弥生	
SP190	南西平2	12	4					
SP191	南西平2	30	29	B			弥生・土師質	
SP192	南西平2	24	14	A			弥生・土師質	
SP193	南西平2	21	13	B			弥生	
SP194	北西平2	0	8	B			弥生・土師質	
SP195	北西平2	55	32	B(Bb)	●	●	弥生・土師器・青磁	
SP196	北西平2	15	27	A				
SP197	北西平2	20	34	A				
SP198	北西平2	35	11	A			弥生・土師質	
SP199	北西平2	20	19	D			弥生	
SP200	北西平2	25	16	A			弥生	
SP201	北西平2	20	27	A			弥生・土師質	
SP202	北西平2	20	11	A			弥生・土師質	
SP203	北西平2	20	17	A			弥生	
SP204	北西平2	12	17	A			弥生	
SP205	北西平2	43	8	B	●	●	弥生	
SP206	北西平2	18	8	B			弥生	
SP207	北西平2	40	5					
SP208	南西平2	19	4	A			弥生・土師質	
SP209	南西平2	18	6	A			弥生	
SP210	南西平2	40	23	A			弥生・土師器・土師質	
SP211	南西平2	25	39	A			弥生・土師質	
SP212	南西平2	29	24	A				
SP213	南西平2	26	8	B			弥生	
SP214	南西平2	20	4	A			弥生	
SP215	南西平2	20	10	A				
SP216	南西平2	33	9	A			弥生	
SP217	南西平2	26	20	A				
SP218	南西平2	45	37	A			弥生・土師器	
SP219	南西平2	25	23	B				
SP220		0					須恵	
SP221	北東平1	14	27	A			弥生・土師質	
SP222	北東平1	24	40	A				
SP223	北東平1	19	19	B			弥生・土師質	
SP224	北東平2	22	5	A			須恵器地須塙。弥生	ST01を切る
SP227	南東平2	43	3	A			弥生	
SP228	南東平2	38	29	A	●	●	弥生・土師質	
SP229	北東平2	22	8	A				
SP230		0					弥生・土師質	
SP231	南西平1	25	19	A			弥生・土師器・土師質	
SP232	南西平1	19	9	B				
SP234	南東平1	16	15	A			弥生・土師質	
SP235	北西平1	47	54	A			弥生・土師器・土師質多量	
SP236	拡張西平	67	655				弥生・土師器・土師質多量	
SP237	南西平1	23	14	A				調査時SP128。重複のため振替
SP238	南西平1	29	26	B				調査時SP129。重複のため振替
SP239	南東平2							調査時SP88。重複のため振替

表7 遺物一覧1(土器・陶磁器)

ID	出土位置 遺構等	種類 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)				調整ほか特徴	色調 上段:外面 下段:内面	備考
				器高	口径	胴径	底径			
001 ST04	弥生土器 甕/縫 城~須丘I古	口～底近 2/3	-	22.7	21.8	-	-	外】口部ヨハケ、胴部タハケ、口 縁ヨナデ、内】指頭痕、ナリ、口 縁ヨナデ	淡黄色10YR8/4 淡黄色10YR8/4	内面に口縁部接合 痕が顕著に残る
003 ST04	弥生土器 甕 須丘I古	口～胴 3/4	-	27.4	26.0	-	-	外】ヨハケ、口縁ヨナデ、内】ナ リ、指頭痕	明赤褐色5YR5/6 暗赤褐色5YR3/4	
004 ST04	弥生土器 甕/縫 城~須丘I古	胴～底 1/1	-	-	>32	-	-	外】ヨコガキ、内】指頭痕、風化	褐色灰色7.5YR4/1 褐色灰色10YR5/1	胴部最大径に沈線
005 ST04	弥生土器 甕 須丘I	底 1/1	-	-	-	10.4	外】ヨナデ+ナリ、内】指頭痕	にぶい黄橙色10YR7/4 にぶい黄橙色10YR7/4	寸胴甕	
006 ST04	弥生土器 甕 須丘I古	底～底 1/4	-	-	(28.0)	(7.0)	外】ヨコガキ、底部ナリ工具ナナ・風 化 内】ナリ工具ナナ、指頭痕	褐色7.5YR6/6 にぶい黄橙色7.5YR7/4		
007 ST04	弥生土器 甕/縫 城/縫	底	-	-	-	6.8	外】風化、脚台状微上底 内】ナ リ	褐色5YR6/6 にぶい黄橙色10YR6/4	微上底	
008 ST04	弥生土器 甕 須丘I古	底	-	-	-	5.6	外】ヨハケ、上底 内】風化	褐色5YR6/8 灰色5Y4/1	上底	
009 ST04	弥生土器 甕 城～須丘I古	頸～底 1/1	-	-	31.0	7.4	外】ヨコガキ、胴部突帯1条 内】 指頭痕	黒褐色7.5YR3/1 褐色5YR4/1	胴部最大径に突帯	
010 ST04	弥生土器 甕 須丘I古	底	-	-	-	7.7	外】ヨコガキ 内】指頭痕	にぶい褐色7.5YR にぶい黄橙色10YR7/2	平底	
012 ST04	弥生土器 甕	口	-	-	(21.0)	-	-	外】内】ヨコナデ、突帯1条	明赤褐色7.5YR3/4 明赤褐色5YR5/8	頸部に突帯1条
015 ST04	弥生土器 甕 須丘I古	口	-	-	-	-	-	外】内】ヨコナデ	022と同一。003とは 別個体	
016 ST04	弥生土器 甕	口	-	-	-	-	-	外】内】ヨコナデ	022と同一。003とは 別個体	
017 ST04	弥生土器 甕/縫 城/縫	口 1/8	-	18.0	-	-	外】内】ヨコナデ	褐色7.5YR7/6 にぶい黄橙色10YR7/4		
018 ST04	弥生土器 甕/縫 城/縫	脚台 1/2	-	-	-	-	外】ヨハケ後ナナ・くびれ部ヨコナデ 内】ナリ、指頭痕	褐色2.5YR6/6 褐色5YR6/6	中空脚台	
019 ST04	弥生土器 甕	底	-	-	-	-	-	-	平底	
020 ST04	弥生土器 高环	脚柱	-	-	-	-	-	-	-	
023 SU03	弥生土器 甕 須丘I	口 1/8	-	(23.0)	-	-	外】ヨハケ後ナナ、口縁ヨコナデ 内】ナ リ	にぶい褐色7.5YR5/4 明黄褐色10YR6/6		
024 SU01-SU03 4層	弥生土器 甕 須丘I	頸～底 1/8	-	-	-	(19.8)	外】ヨハケ 内】指頭痕、風化	褐色5YR6/6 褐色5YR6/8		
025 SU01	弥生土器 甕 須丘I古	口	-	-	-	-	-	-	52と同一	
026 SU02	4層	底 1/3	-	-	-	-	外】内】ヨナデ	にぶい褐色10YR6/4 にぶい褐色10YR7/4	54・55と同一か	
027 SU03	4層	弥生土器 甕/縫 須丘I古	口	-	-	-	外】内】ヨナデ、口縁ヨコナデ	淡黄色10YR8/4 にぶい黄橙色10YR7/3	口縁下面がツマミに より薄化	
028 SU04	4層	弥生土器 甕/縫 城/縫	口 1/10	-	-	-	外】内】ヨコナデ	灰黄褐色10YR5/2 灰黄褐色10YR5/2		
029 SU04	弥生土器 甕 須丘I	口 1/9	-	(28.0)	-	-	外】内】ヨコナデ	褐色5YR7/6 褐色5YR7/6		
032 北東サブレ	弥生土器 甕/縫 城/縫	口 1/10	-	-	-	-	外】内】ヨコナデ	褐色5YR6/6 褐色5YR6/6	断面梢円口縁(玉縁 状)	
033 北東サブレ	弥生土器 甕/縫 城/縫	口 1/10	-	-	-	-	外】内】ヨコナデ	にぶい褐色5YR7/4 褐色2.5Y7/6	断面三角	
034 北東サブレ	弥生土器 甕	口	-	-	-	-	-	-	断面三角	
035 北東サブレ	弥生土器 甕/縫 城/縫	口 1/10	-	(24.0)	-	-	外】内】ヨコナデ	淡黄褐色10YR8/3 淡黄褐色10YR8/3		
044 北東サブレ	弥生土器 甕 須丘I古	口 1/12	-	(23.2)	-	-	外】ナリ、口縁ヨコナデ 内】ナリ、 指頭痕	褐色2.5Y6/6 褐色2.5Y6/6		
045 SP218+ SP81	土器部 古墳中期前葉	口 3/4	-	(14.6)	-	-	外】ナリ、口縁ヨコナデ 内】口縁3 ナリ、ナリ	淡黄色2.5Y8/4 淡黄色2.5Y8/4	粗製、口縁直線	
046 SP218	土器部 古墳中期前葉	口 1/6	-	(14.0) (17.0)	-	-	外】ナリ、口縁ヨコナデ 内】ナリ 後ナリ	淡黄色5.5Y7/3 褐色灰色10YR5/1	粗製、口縁弱内溝、 斜ハケ目	

表8 遺物一覧2(土器・陶磁器)

ID	出土位置 遺構等	種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)			調整ほか特徴	色調 上段:外面 下段:内面	備考
				器高	口径	胴径			
047 SP218		土師器 甕	口～肩 1/6	-	-	-	外】肩部テテハケ、口縁ヨコナデ 内】	淡黄色2.5Y8/4 淡黄色2.5Y8/4	粗製、口縁微弱内溝
古墳中期前葉							テテハケ、口縁ヨコナデ		
048 SP218		土師器 甕	口 1/3	-	(13.6)	-	- 外・内】ハケ後ヨコナデ*	淡黄色2.5Y8/4 淡黄色2.5Y8/3	粗製、口縁微弱内溝
古墳中期前葉									
049 SP218		土師器 甕	口～頸 1/1	-	13.0	22.5	-	外】テテハケ、後口縁ヨコナデ 内】テ テ、口縁ヨコナデ*	淡黄褐色10Y8R/4 淡黄褐色10Y8R/4
古墳中期前葉									粗製、口縁上端削内溝
052 SU01	4層	弥生土器 甕須玖I古	口 1/6	(22.8)	-	-	- 外・内】ナデ、口縁ヨコナデ*	橙色2.5Y6/8 橙色7.5YR7/6	25と同一
053 SU01	4層	弥生土器 甕須玖I	口～肩 1/3	(28.2)	-	-	- 外・内】ナデ、口縁ヨコナデ*	橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6	
054 SU02		弥生土器 甕城～須玖I古	口～頸 1/6	-	-	-	外】ヨコナデ、突帯1条 内】ナデ、 指頭痕	橙色2.5YR6/6 橙色7.5YR7/6	55と同一か
055 SU02		弥生土器 甕	口～頸	-	-	-			54と同一か
056 北東サブトレ		土師器 甕須玖I古	底	-	-	6.0	外】テテハケ、風化 内】ナデ、ヨビオ 手土	灰黄褐色10YR5/2 灰褐色10YR4/1	弱上底
057 SP224		須玖I古	直口甕	口～頸	-	7.0 (11.8)	外】回転ナデ、静止ナデ 内】回転 ナデ	灰白色2.5Y8/1 灰白色2.5Y8/1	
061 北東サブトレ		弥生土器 甕須玖I古	口 欠	-	-	-	外・内】ヨコナデ*	淡黄色10YR8/4 淡黄色2.5YR8/4	
066 北東サブトレ		弥生土器 甕須玖I	底 1/8	-	-	-	外】テテハケ 内】ナデ、指頭痕	橙色5YR6/6 灰褐色5YR4/1	
067 北東サブトレ		弥生土器 甕須玖I古	底 1/1	-	-	-	4.6 外・内】ナデ、風化	赤橙色10R6/5 赤橙色10R6/8	脚台状、指頭上底
069 北東サブトレ		弥生土器 甕須玖I古	底 1/4	-	-	-	8.0 外】ナデ、底部ヨビオナデ 内】ナデ	にぶい・橙色5YR7/4 灰白色2.5Y8/2	平底(指頭微上底)
076 北東サブトレ		弥生土器 器台か	1/3	-	-	-	外】テテハケ、沈線、後ナデ 内】ハケ シボリ痕	浅黄褐色10YR8/4 浅黄色2.5Y8/4	沈線3条(下位の1条 はナデ消される)
079 北東サブトレ		土師質土器 甕	口～底	2.3 (7.8)	-	(5.4)			
081 北東サブトレ		土師質土器 甕	口～底	2.4 (8.2)	-	(5.2)			
082 北東サブトレ		土師質土器 甕	口～底	2.7 (9.0)	-	(6.2)			
083 北東サブトレ		土師質土器 甕	口～底	-	-	-			
096 北東サブトレ		瓦質土器 2次加工石揮	完	-	-	-			
099 SP20	SB03	土師質土器 坏	底 1/2	-	-	(5.4)	外】回転ナデ 内】静止ナデ、指頭 痕	にぶい・黄橙色10YR7/2 浅黄褐色10YR8/4	糸切
101 SP63	SB03	天日 体	体	-	-	-			
103 SP225	SB03	土師器 小型台脚か 古墳初頭	受 1/3	-	-	-	外・内】ナデ*	にぶい・橙色7.5YR7/4 橙色2.5YR6/6	
105 SP226	SB03	瓦質土器 其上部 深鉢形火鉢 15-16C	口 1/10	-	(16.0)	-	外】突帯4条、印花文(菊花)、突 帯下に薬研瓶状の底条線(4条 1単位) 内】ロハケ後ナデ	黒褐色10YR3/1 灰褐色10YR4/1	スタンプ菊花文
109 SP226	SB03	陶器 胸	胸	-	-	-			104と同一
111 SP137	SD03	土師質土器 甕	口～底 1/8	2.3 (11.29)	-	(8.8)	外・内】回転ナデ*	淡黄褐色2.5YR8/6 橙色7.5YR7/6	糸切
114 SP150	SB03	土師器 高环	脚 1/8	-	-	-	外・内】ナデ 内】シボリ痕、ナデ*	赤色10R5/6 赤色10R5/6	被熱赤化
118 SC01		土師質土器 小皿	口～底 1/3	1.3 (7.1)	-	(3.8)	外・内】回転ナデ、口縁面取	淡黄褐色2.5YR8/6 淡黄褐色2.5YR8/6	やや精良
122 SC01		青磁 体	口	-	-	-			
123 SC01		青磁 体	底	-	-	-			
125 SP20	SB03	土師質土器 甕	底 1/8	-	-	-	外・内】ナデ*	にぶい・黄橙色10YR7/4 にぶい・黄褐色10YR7/4	
126 SP103	SP03 4層 周辺	土師器 甕	口 1/8	-	(17.0)	-	外・内】回転ナデ、口縁面取、風 化	橙色2.5YR7/6 橙色2.5YR6/6	口縁上端面取・内 フマキ
127 SP03		黒色土器 内墨・柄	底 1/2	-	-	5.6	外】回転ナデ・ナデ 内】ナデ*	にぶい・黄褐色10YR7/3 暗灰色N3/	内墨
130 SP26+	SP70	瓦質土器 羽釜か	体 欠	-	-	-	外・内】回転ナデ、指頭痕	暗灰色N3/	
133 SP48-P1		土師質土器 甕	底 1/8	1.9 (9.4)	-	(9.6)	外・内】ロハケ*	淡黄褐色2.5YR8/4 橙色2.5YR7/6	
135 SP73		土師質土器 小皿	口～底 1/4	(1.4) (8.0)	-	(7.0)	外・内】ヨコナデ・ナデ*	にぶい・黄褐色10YR7/4 にぶい・黄褐色10YR7/4	
136 SP75		土師質土器 甕	口 1/10	-	(10.6)	-	外・内】ナデ、口縁面取	黒褐色2.5YR3/1 黒褐色2.5YR3/1	体部に沈線

表9 遺物一覧3(土器・陶磁器)

ID	出土位置 遺構等	種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)			調整ほか特徴	色調 上段:外面 下段:内面	備考
				器高	口径	胴径			
140 SP109		須恵器 灰	-	-	-	67.0	外・内】風化	灰白色10YR8/2 灰白色2.5Y1/2	
142 SP116		土師質土器 小皿	口～胴 3/4	2.2 (6.2)	-	(1.7)	外・内】回転ナデ、糸切	浅黄橙色10YR8/6 浅黄橙色2.5YR8/6	糸切
145 SP123b		土師質土器 环か	底 1/6	-	-	-	(9.0) 外・内】ナデ	浅黄橙色10YR8/4 浅黄橙色10YR8/4	
148 SP126		土師質土器 环か	口 1/10	-	-	-	外・内】ナデ、口縁面取	浅黄橙色7.5YR8/4 紺色5YR7.5/4	
150 SP149		土師質土器 小皿	口～底 1/9	2.3 (8.3)	-	(4.2)	外・内】回転ナデ、口縁面取、高 台輪ナデ	灰白色2.5Y8/1 灰白色10YR8/2	被熱変色
152 SP165		土師質土器か 小皿	底 1/4	-	-	-	(9.0) 外・内】静止ナデ	灰白色10YR8/2 灰白色2.5YR8/2	糸切
163 SP172		土師質土器 环か	口 1/4	-	-	-	外・内】静止ナデ	灰白色10YR8/2 灰白色2.5YR8/2	
166 SP180 + P20	4層	土師器 楕円高杯 古墳初頭	口～裾 1/2	13.5	10.8	-	11.8 外】颈部ヨコナデ+ナデ、脚部タテ工 具ナデ後ナデ 内】ナデ、風化	褐色5YR7/8 褐色5YR7/8	脚部に穿孔4箇所。 庄内系楕円高杯
167 SP180 + P20		土師器 甕	口～肩 1/3	-	(14.6)	-	外・内】ナデ	褐色5YR7/8 褐色5YR7/8	
168 SP180		土師器 甕	口～肩 1/4	-	(13.6)	-	外】不定ナデ、口縁回転ナデ 内】 風化	にぶい黄橙色10YR7/4 褐色5YR6/6	
169 SP183		土師質土器 底	1/3	-	-	(4.8)	外・内】ナデ	褐色灰10YR5/1 にぶい黄褐色10YR5/3	
170 SP195	2層	土師器 甕/壺	底 1/1	-	-	-	外】工具ナデ後ナデ 内】ヨコナデ	にぶい黄橙色10YR7/3 浅黄橙色10YR8/4	丸底
172 SP218		土師器 甕	口 1/8	-	(22.0)	-	外・内】静か後回転ナデ	灰黄褐色10YR8/2 淡黄色2.5Y8/4	弱内溝、内ツマミ
175 SP231		土師器 高杯	脚柱 1/1	-	-	-	外】颈部ヨコナデ、脚部タテ後ナ デ	にぶい黄橙色10YR7/3 褐色5YR7/6	
182 SP234		土師質土器 底	1/3	-	-	(6.4)	外・内】ナデ	明黄褐色10YR7/6 明黄褐色10YR7/6	
183 SP235		土師質土器 小型壺	口～底 1/4	2.1 (6.8)	-	(4.0) 外】回転ナデ 内】ヨコナデ、ヨビナ デ	浅黄褐色10YR8/4 褐色2.5YR7/6	精良、赤色粒多	
185		陶器	全体 灰	-	-	-	外】ハケメ 内】盛り目付		
187 P2	4層	弥生土器 甕/壺 城/越	口 1/8	-	(21.0)	-	外・内】ナデ、口縁ヨコナデ、口縁ヨ コナデ	浅黄褐色10YR8/3 灰白色10YR8/3	
189 P12	4層	弥生土器 甕	口 1/8	-	(19.8)	-	外・内】ヨコナデ	にぶい黄褐色10YR8/3 にぶい黄褐色10YR8/4	
190 P13	4層	弥生土器 甕	口 1/8	-	(26.0)	-	外・内】ヨコナデ	褐色7.5YR6/6 褐色5YR7/8	
191 P10	4層	弥生土器 甕	口 1/8	-	(26.0)	-	外・内】ヨコナデ	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい黄褐色10YR7/3	
193 P11	4層	弥生土器 甕/壺 須玖I	底 1/3	-	-	-	外】タテハケ、風化 内】ナデ	褐色5YR6/8 にぶい褐色10YR5/3	190と同質
194 P13	4層	弥生土器 甕	口 1/9	-	(30.6)	-	外・内】ヨコナデ	褐色7.5YR4/3 暗褐色7.5YR3/3	口縁内側突出の環 に幅1.5mm程度の条線
197 P15	4層	陶器	全体 灰	-	-	-	-		
198 P17	4層	陶器 埴跡	口 灰	-	-	-	外】輪積痕、回転ヨコナデ 内】輪 積痕、接ぎ目	浅黄色10YR8/3 浅黄色10YR8/3	
199 P18	4層	弥生土器 甕	口 1/6	-	(18.4)	-	外】タテハケ、ナデ、口縁ヨコナデ 内】ナデ、指頭痕	褐色7.5V5/1 灰色7.5V5/1	青灰色
202 P25	4層	弥生土器 甕	口～頸 1/4	-	(28.0)	-	外・内】ナデ、口縁ヨコナデ	褐色5YR6/8 明赤褐色5YR5/6	
203 P22	4層	黒色土器 両黒・楕	底 1/1	-	-	6.4	外】回転ナデ 内】ヨコナデ	黒褐色2.5Y3/1 黒褐色2.5Y3/1	両黒
205 P24	4層	土師器 小型広口壺	底 1/1	-	-	13.6	外】タテハケ 内】指頭痕	にぶい黄褐色10YR7/4 にぶい黄褐色10YR7/4	
210 P33	4層	弥生土器 甕	底 1/1	-	-	7.8	外】タテハケ風化 内】ナデ	褐色7.5YR7/6 褐色7.5YR7/6	脚台(中空上底) 211と同一か
211 P33	4層	弥生土器 甕	口 1/12	-	(24.0)	-	外】ナデハケ後ナデ、口縁ヨコナ デ 内】ナデ	褐色7.5YR6/6 褐色5YR6/6	脚台(中空上底) 210と同一か
213 拡張東半2 ピットか		黒色土器 内黒・楕	底 1/2	-	-	-	(6.6) 外・内】ナデ	浅黄褐色10YR8/3 黑色2.5GY2	内黒

表 10 遺物一覧 4 (土器・陶磁器)

ID	出土位置 遺構等	種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm)				調整ほか特徴	色調 上段:外面 下段:内面	備考
				器高	口径	胴径	底径			
214 ラベルなし	土師器 小皿	口～底 2/3	1.4 (6.6)	—	(4.0)	外・内】ナデ、系切		にぶい黄褐色10YR6/3 にぶい黄褐色10YR6/3		系切
216 東辺レンチ 4層	弥生土器 甕・壺	底 1/1	—	—	5.7	外】ナデ、底部ヨコナデ		橙色2.5YR6/6 橙色2.5YR6/6		強上底
220 東辺レンチ 4層	土師器 甕・壺	底 1/2	—	—	(6.4)	外】ナデ、底部工具ナデ 内】ハ ケノ、指頭痕		にぶい褐色7.5YR7/4 浅黄褐色7.5YR6/3		平丸底
224 北辺レンチ 西手 須玖II新	弥生土器 甕	口 欠	—	—	—	外・内】ヨコナデ'		にぶい黄褐色10YR7/3 黄褐色10YR8/6		
230 北辺レンチ 4層	弥生土器 甕	頭～底 1/8	—	—	—	外】ナデ、安衛1条 内】ハナテ ナデ		橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6		
237 東半(群) 4層	弥生土器	—	—	—	N1300.9					口、底、頭
239 東半 4層	土師質土器 环	口～体 1/18	—	(15.2)	—	外・内】回転ナデ、体部沈線				体部に沈線
240 東半(群) 4層	土師質土器 甕	底 欠	—	—	—					
243 東半 4層	土師器 甕	口～肩 1/8	—	(17.0)	—	外・内】口縫ヨコナデ、風化		橙色5YR6/8 にぶい黄褐色10YR7/4		
244 東半 4層	青磁	口 欠	—	—	—					雷文
245 東半 4層	綠釉小 甕	体 欠	—	—	—					
246 北東半1 4層	弥生土器 甕・壺	口 欠	—	—	—	外】ナデ、口縫ヨコナデ 内】ナデ		灰黄褐色10YR6/2 浅黄褐色7.5YR8/4		
253 扯張東半1 3-4層境 甕・壺	土師質土器 小皿	底 欠	—	—	—	外・内】ナデ		にぶい黄褐色10YR7/4 橙色7.5YR7/6		
255 扯張東半1 3-4層境 土師質土器 环	口～底 1/8	1.5 (7.2)	—	(4.6)	外・内】回転ナデ、系切			浅黄褐色10YR8/3 橙色5YR7/6		系切
256 扯張東半1 3-4層境 青磁 瓶	土師質土器 环	口～体 1/8	—	(15.8)	—	外・内】静止ナデ、口縫回転ナデ		浅黄褐色10YR8/3 浅黄褐色10YR8/3		
258 扯張東半1 3-4層境 瓶	口 欠	—	(15.0)	—	—	外】無縫通弁		灰オーリーブ色7.5YR6/2 灰オーリーブ7.5Y5/2		
263 扯張東半1 3-4層境 陶器 里 壁前II期	陶器	口～肩 1/4	7.6 (27.5)	—	10.5	外】高台無袖 内】溝縁口、象嵌 幾何文、砂目積		暗灰黄色5Y4/2 にぶい黄褐色10YR5/3		三島唐津(武雄系)
264 扯張東半2 3-4層境	土師器	口 欠	—	(14.0)	—	外・内】回転ナデ、口縫面取・肥 厚		橙色5YR7/6 橙色5YR7/6		
265 扯張東半2 3-4層境 弥生土器 甕・壺	弥生土器 甕・壺	底 1/1	—	—	(4.8)	外】ナデ 内】ナデ、指頭痕		にぶい黄褐色5Y4/1 灰黄色2.5Y7/2		平底・微上底
266 扯張東半2 3-4層境 小型鉢	脚台	口 欠	—	—	3.9	外・内】ヨコナデ・ナデ		橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6		手づくね
275 扯張東端 4層	弥生土器 甕	底 1/2	—	—	—	外】ハナテ後ナデ、頸部ンボリ 内】 ハナテナデ		橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6		カクシ付近
276 扯張東端 4層	土師器 甕	口～肩 1/5	—	(15.6)	—	外・内】回転ナデ		橙色7.5YR7/6 橙色5YR7/6		
281 西半 5層	弥生土器 金・甕 須玖I小 須器	口 1/12	—	—	—	外・内】ヨコナデ'		明褐色2.5YR5/6 明褐色2.5YR5/6		赤彩
285 西半 3-4層境	須器 环身 TK43	受 1/15	—	—	—	外・内】回転ナデ'		黄灰色2.5Y5/1 黄灰色2.5Y5/1		
292 西半 3-4層境	白磁か らん	口 1/12	—	(13.0)	—	外・内】瓶袖、口縫釉剥ぎ取 (口壳)		灰白色5Y7/2 灰白色5Y7/2		口壳
296 北西半1 4-5層境	弥生土器 小型甕 乳頭器 蓋环 MT10	口 1/10	—	(17.0)	—	外・内】口縫ヨコナデ、ナデ		橙色5YR7/6 橙色5YR6/6		口縫平坦面に蓋紙 じ孔2
297 扯張西半1 3-4層境	須器	天 1/6	—	—	—	外】回転ナデ 内】ナデ		灰色5Y4/1 灰黄褐色10YR8/2		
298 扯張西半1 3-4層境 (群)	須器	二 —	—	—	—	—				群登録(环蓋、裏体 部など)
300 扯張西半1 3-4層境	黒色土器 陶里・被	高台 1/1	—	—	(5.2)	外・内】ナデ'		黒褐色2.5Y3/1 黒褐色2.5Y3/1		
301 扯張西半1 3-4層境	土師質土器 小皿	口～底 1/9	0.9 (9.8)	—	(8.2)	外・内】ナデ'		にぶい黄褐色10YR7/4 にぶい黄褐色10YR7/4		

表 11 遺物一覧 5 (石器)

掲載番号	ID	出土位置	器種	石材	法量(cm ³ g)			備考	
					横幅	幅	厚み		
5011-1	448	不明	石器	黒曜石(辰岳系)	2.0	2.1		押型文期	
5011-2	409	SL01	石器	安山岩	2.0	1.6	4.0	0.8	
5011-3	466	SP233	石器	黒曜石(辰岳系)	1.5	1.5	4.0	0.6	
5011-4	465	SP229底面地山	石器	安山岩	1.8	2.2	4.0	1.1	
5011-5	473	東辺レンガ南半	5層	楔形石器か	黒曜石(辰岳系)	2.6	2.3	1.3	5.4
5011-6	446	SP225	二次加工剝片	黒曜石(辰岳系)	2.3	1.8	1.0	3.8	
5011-7	464	SP26	二次加工剝片	黒曜石(未測定)	2.5	3.4	1.0	12.3	
5011-8	460	西平	4層	二次加工剝片	安山岩	5.9	2.2	1.5	13.4 使用痕
5011-9	417	東平	4層	二次加工剝片	黒曜石(辰岳系)	4.1	2.0	8.0	4.0 使用痕
5011-10	407	ST01中央	二次加工剝片	黒曜石(辰星III群)	3.4	1.0	7.0	3.6	
5011-11	444	SP28	剝片	黒曜石(辰岳系)	2.8	1.7	1.2	3.9	
5011-12	410	SL03	4層	剝片	安山岩	5.9	2.6	1.3	
5011-13	408	ST04西側	剝片	黒曜石(辰岳系)	4.2	2.5	1.3	10.7	
5011-14	442	SP06周辺	剝片	黒曜石(辰岳系)	3.0	3.4	0.9		
5011-15	472	北張東平2	3~4層境	剝片	黒曜石(辰岳系)	2.1	3.1	9.0	4.5
5011-16	430	S-35	4層	石核様石器	黒曜石(辰岳系)	3.0	3.7	1.7	21.1
5011-17	437	S-1	4層	石核様石器	安山岩	3.7	4.4	1.6	32.5
5012	401	ST04	西側	台石	流紋岩	11.2	8.6	2.4	318.1
5012	402	ST04-7		嵌石	流紋岩	12.4	6.7	3.1	278.6
5012	412	SL06		台石	砂岩	12.9	9.2	1.7	356.0
5012	435	S-38	4~5層境	垂飾	不明	2.2	1.4	0.6	2.4
5011真1	481	SC01		不明	粘板岩	1.9	0.9	0.8	3.9 小型柱状片刃石斧か
5011真11	480	SC01		火打石か	石英	2.9	2.2	1.6	14.3
5011真11	456	北東平1	4層	火打石か	石英	2.5	1.8	1.4	7.6
5022-1	1064	SP172	剝片	黒曜石(辰岳系)	2.2	1.5	0.5	1.8	
5022-2	1033	ST04	剝片	黒曜石(辰岳系)	2.6	1.9	1.0	4.9	
5022-3	1034	ST04	剝片	黒曜石(辰岳系)	2.4	2.1	0.7	2.3	
5022-4	1007	東辺レンガ南半	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	3.5	1.7	0.7	4.1
5022-5	1052	SP73	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.5	1.4	0.3	0.8	
5022-6	1047	SP06	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.1	1.8	0.5	1.0	
5022-7	1051	SP72	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.8	1.9	0.8	1.8	
5022-8	1013	北辺トレンチ	剝片	黒曜石(辰岳系)	2.8	2.0	0.6	3.7	
5022-9	1055	SP106	スクリーバー	黒曜石(辰岳系)	2.0	1.8	0.4	2.2	
5022-10	1059	SP114	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.8	1.7	1.0	3.4	
5022-11	1005	西平	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	2.3	1.6	0.7	3.5
5022-12	1048	SP27	剝片	黒曜石(釣尾1群)	1.6	1.6	0.8	2.8	
5022-13	1049	SP01	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.8	1.3	0.8	1.8	
5022-14	1029	ST01	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.5	1.0	0.2	0.4	
5022-15	1009	東辺レンガ南半	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.5	8.0	0.2	0.3
5022-16	1024	SC01+ブレ	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.0	1.1	0.2	0.3	
5022-17	1070	SP230	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.7	1.5	0.5	1.8	
5022-18	1011	北西平レンチ	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.3	1.8	0.7	2.1
5022-19	1054	SP106	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.5	1.1	0.1	0.4	
5022-20	1071	SP235	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.9	1.5	1.3	4.4	
5022-21	1062	SP129	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.5	1.5	0.2	0.8	
5022-22	1061	SP129	石器未完成か	黒曜石(辰岳系)	2.2	1.4	0.5	1.9	
5022-23	1063	SP201	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.6	2.1	0.8	2.8	
5022-24	1012	北西平レンチ	5層	剝片	黒曜石(辰星III群)	1.9	1.0	0.5	1.2
5022-25	1072	SP235	剝片	黒曜石(辰岳系)	0.9	1.7	0.4	0.9	
5022-26	1063	SP137	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.4	1.5	0.4	1.2	
5022-27	1035	ST04	剝片	黒曜石(釣尾1群)	1.6	0.7	0.2	0.4	
5022-28	1020	SC01+ブレ	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.1	2.1	0.7	2.3	
5022-29	1053	SP95	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.3	1.2	0.6	0.8	
5022-30	1060	SP124	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.1	1.8	0.3	0.5	
5022-31	1009	東辺レンガ南半	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.4	1.2	0.6	0.7
5022-32	1010	東辺レンガ南半	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.7	2.3	0.5	2.3
5022-33	1021	SC01+ブレ	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.1	1.6	0.5	0.8	
5022-34	1001	北西平1	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.3	1.0	0.3	0.4
5022-35	1022	SC01+ブレ	剝片	黒曜石(辰岳系)	0.8	1.5	0.3	0.5	
5022-36	1030	ST01	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.3	1.7	0.5	1.0	
5022-37	1014	SL01周辺	剝片	黒曜石(辰岳系)	0.7	1.6	0.4	0.4	
5022-38	1016	SL01周辺	剝片	黒曜石(辰岳系)	0.9	1.7	0.6	0.8	
5022-39	1002	西平	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.5	1.8	0.7	2.4
5022-40	1015	SL01周辺	剝片	黒曜石(辰岳系)	2.0	1.1	0.4	0.7	
5022-41	1004	西平	5層	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.6	1.1	0.5	0.7
5022-42	1028	ST01	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.7	1.9	0.8	2.3	
5022-43	1050	SP72	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.1	1.8	0.4	1.1	
5022-44	1006	北西平1	4~5層境	剝片	黒曜石(辰岳系)	1.2	1.6	0.8	1.8

IX. 自然科学分析（放射性炭素年代測定）

バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・黒沼保子

1. はじめに

諫早農業高校遺跡から出土した炭化材 6 点について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、SP20 と SP25、SP66、SP58、SP116、SP117 から出土した炭化材である。SP58 出土の炭化材は丸木で最終形成年輪が残存していた。それ以外の 5 点はいずれも破片で、最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。形状の確認は実体顕微鏡下で行った。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (バレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34999	遺構: SP20 試料No. 1	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-35000	遺構: SP25 試料No. 2	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-35001	遺構: SP66 試料No. 3	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-35002	遺構: SP58 試料No. 4	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-35003	遺構: SP116 試料No. 5	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-35004	遺構: SP117 試料No. 6	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{13}C 年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{13}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{13}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{13}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{13}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{13}C 年代がその ^{13}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{13}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{13}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{13}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{13}C の半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{13}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{13}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年年代範囲であり、同様に 2σ 暦年年代範囲は95.4%信頼限界の暦年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の紙軸上の曲線は ^{13}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1 σ)	^{13}C 年代 (yrBP±1 σ)	^{13}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年年代範囲	2σ 暦年年代範囲
PLD-34999 試料No. 1	-27.73±0.13	437±22	435±20	1435-1456 cal AD (68.2%)	1426-1476 cal AD (95.4%)
PLD-35000 試料No. 2	-26.59±0.20	519±22	520±20	1409-1429 cal AD (68.2%)	1331-1339 cal AD (2.2%) 1397-1440 cal AD (93.2%)
PLD-35001 試料No. 3	-29.02±0.20	443±23	445±25	1434-1453 cal AD (68.2%)	1424-1470 cal AD (95.4%)
PLD-35002 試料No. 4	-27.99±0.11	636±22	635±20	1295-1314 cal AD (25.5%) 1357-1388 cal AD (42.7%)	1287-1325 cal AD (38.9%) 1344-1395 cal AD (56.5%)
PLD-35003 試料No. 5	-27.42±0.23	667±22	665±20	1285-1300 cal AD (39.6%) 1369-1381 cal AD (28.6%)	1278-1313 cal AD (52.6%) 1357-1389 cal AD (42.8%)
PLD-35004 試料No. 6	-28.71±0.22	424±22	425±20	1440-1465 cal AD (68.2%)	1432-1487 cal AD (95.4%)

4. 考察

SP20出土の炭化材(試料No.1: PLD-34999)は、1426-1476 cal AD (95.4%)で、15世紀前半～後半の暦年代範囲であった。これは室町時代に相当する。

SP25出土の炭化材(試料No.2: PLD-35000)は、1331-1339 cal AD (2.2%)および1397-1440 cal AD (93.2%)で、14世紀前半および14世紀末～15世紀前半の暦年代範囲であった。これは鎌倉時代末～室町時代に相当する。

SP66 出土の炭化材（試料 No. 3 : PLD-35001）は、1424–1470 cal AD (95.4%) で、15世紀前半～後半の曆年代範囲であった。これは室町時代に相当する。

SP58 出土の炭化材（試料 No. 4 : PLD-35002）は、1287–1325 cal AD (38.9%) および 1344–1395 cal AD (56.5%) で、13世紀後半～14世紀末の曆年代範囲であった。これは鎌倉時代～室町時代に相当する。

SP116 出土の炭化材（試料 No. 5 : PLD-35003）は、1278–1313 cal AD (52.6%) および 1357–1389 cal AD (42.8%) で、13世紀後半～14世紀後半の曆年代範囲であった。これは鎌倉時代～室町時代に相当する。

SP117 出土の炭化材（試料 No. 6 : PLD-35004）は、1432–1487 cal AD (95.4%) で、15世紀前半～後半の曆年代範囲であった。これは室町時代に相当する。

木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。SP58 出土の炭化材は最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は、枯死もしくは木材が伐採された年代を示していると考えられる。

SP20 と SP25、SP66、SP116、SP117 出土の炭化材は、いずれも最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受けて、木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337–360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869–1887.

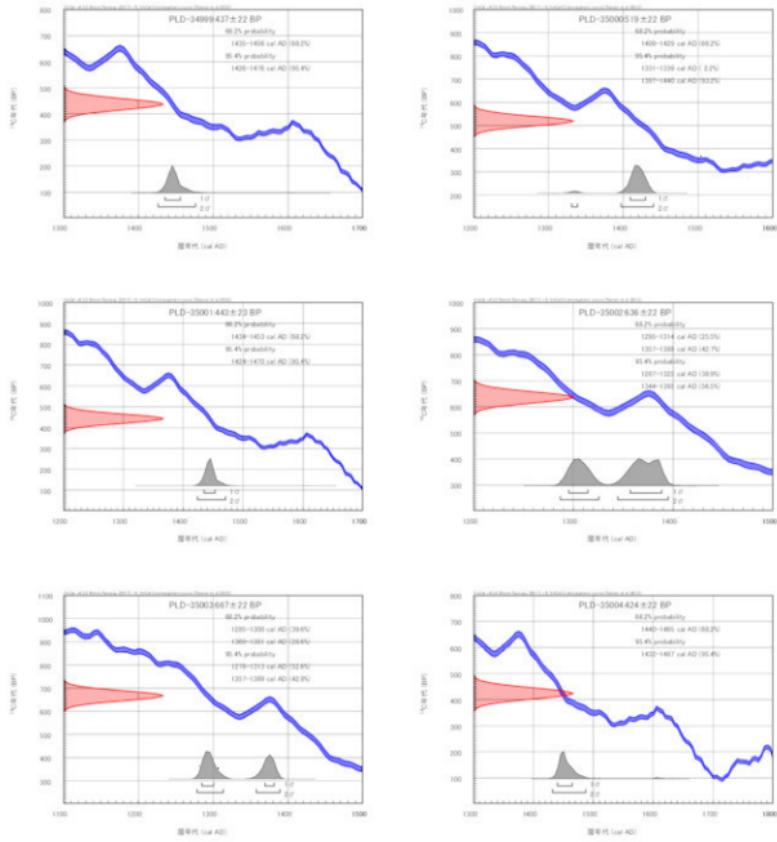


図1 历年較正結果

X. 総括

1. 石器

(1) 黒曜石製剥片石器群の分析

諫早農業高校遺跡からは包含層を主体に数多くの安山岩、黒曜石を素材とする石器が出土している。ここでは黒曜石を素材とした剥片石器について考察する。

第4層下部から第5層上部から出土した主な石器(図22)を示す。石器と考えられる資料は少ない。9は右側縁に刃部調整加工が施された小形のスクレイパーである。22は石鎌の未完成品の可能性がある。以上の2点を除けば他は剥片および碎片である。剥片のうち縦長になるものは1・3・4・8・11と24で量的には少ない。4を除けばいずれも縦横比が2:1から1:1に近くなる寸詰まりの剥片である。これに対し横長剥片は9・18・23・30・32・33・36のように幅広の形態になるものが主体を占める。3・4・8など割と大きな剥片類は石鎌あるいは削器等の素材の可能性がある。原縁面を残置する剥片類が多くみられ、そのあり方から平坦な縁面を有する角縁になるものがほとんどを占めていることがわかる。例外的なものは12・20・28で、12・20は小形の亜角縁で針尾系、28は爪跡状の縁面が特徴的な松浦系の黒曜石と思われる。剥片剥離技術の観点からみると、打面を平坦な縁面とするもの(1~4・9・18・23など)が多い特徴が見られる。また表裏で打点を90度転移させるもの(1・4・7など)も多い。

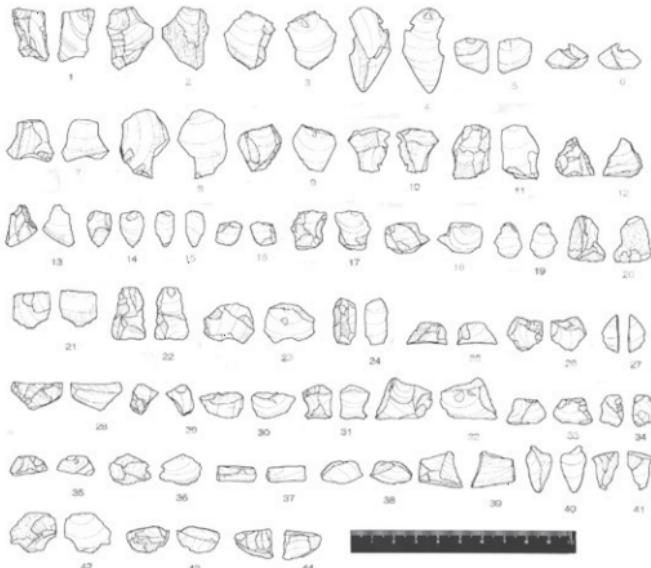


図22 黒曜石製剥片石器(蛍光X線分析測定資料)

(2) 黒曜石製剥片石器群の位置づけ

本遺跡から出土した弥生時代以前の遺物からは次のようなことが指摘できる。

- ① 時期決定の目安となる土器が弥生時代中期初頭～同前葉に限定されており、縄文時代の土器は全く出土していない。
- ② 石器に関しては出土状態が不明な縄文時代早期の押型文土器に伴う石鏃（図 11-1）を除くと明確に時期決定できるものはない。
- ③ 第4層は、中世に形成されたと考えられるが、層下位は弥生時代中期初頭～同前葉の土器とともに多くの剥片石器が出土した。石器は第5層の上部からも出土した。
- ④ 剥片の多くが、平坦な縦面を打面としており、さらに表裏で打点を 90 度転移するという特徴が認められる。

北部九州の弥生時代中期の剥片石器研究は吉留秀敏を白眉とする（吉留 2002、13）。それによれば福岡平野の弥生時代中期の剥片石器群は、「石鏃、搔器、削器、石錐、楔形石器」などからなり・中略…石鏃は資料数が少ないが抉りの浅い三角鏃を基調とする（吉留 2002）らしい。剥片剝離技術については弥生時代前期にみられる打面転移や縦面を打面とする傾向（小畠 1991）を踏襲しながら円盤状を呈するものが現れるとし技術的後退と評価している（吉留 2002）。

こうしたことから諫早農業高校遺跡の剥片石器群を弥生時代中期初頭から前葉に位置づけることは十分に可能と思われる。その石器群を図 23 に示す。石錐や石核などは不在であるが福岡平野と共に通する要素が非常に強い。長崎県では剥片石器が弥生時代まで使用されることは周知の事実であるが、良好な石器群に恵まれずその実態は不明であった。本資料は剥片石器の終焉を示すものとして重要であろう。

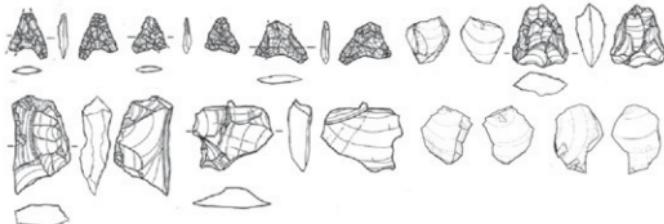


図 23 弥生時代中期前半の黒曜石製剥片石器群

[引用・参考文献]

- 小畠弘己 1991 「第 26 次調査地点」『比恵遺跡群（10）』福岡市文化財調査報告書第 235 集、福岡市教育委員会。
山崎頼人 2013 「弥生時代北部九州の剥片石器石材の流通」『考古学ジャーナル』No. 638、10-14 頁、ニューサイエンス社。
吉留秀敏 2002 「北部九州弥生時代中期の剥片石器」『究班』II、埋蔵文化財研究会 25 周年記念論文集、117-124 頁、埋蔵文化財研究会。
吉留秀敏 2012 「筑後南部地域における弥生時代剥片石器の研究－八女地域における弥生時代剥片石器の様相－」『九州考古学』第 87 号、47-65 頁、九州考古学会。

(3) 蛍光X線分析による原産地分析

弥生時代の黒曜石製石器の蛍光X線分析の事例は九州地方ではほとんど行なわれていない現状である。長崎県埋蔵文化財センターでは近年九州地方の黒曜石原産地の蛍光X線分析を実施しており判別図もより充実したものとなりつつある。

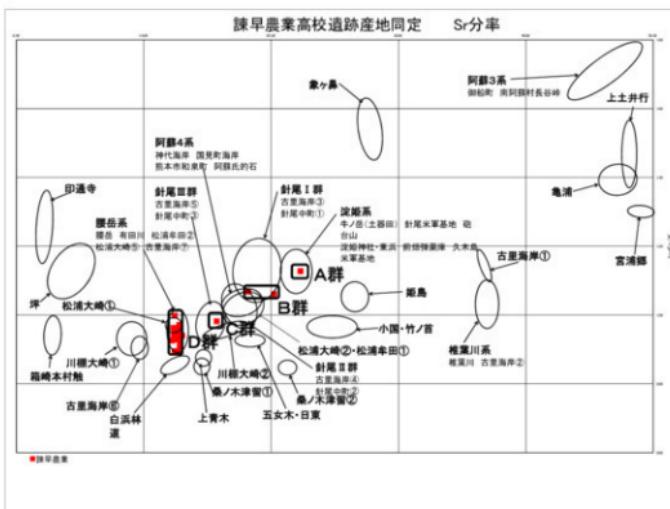
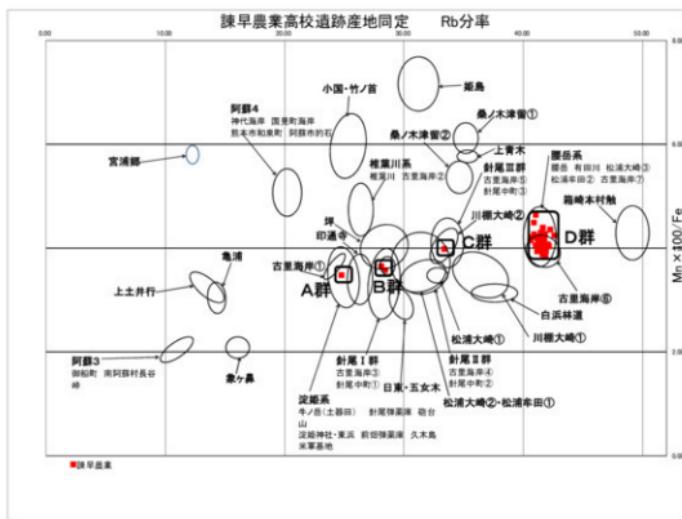


図24 九州黒曜石原産地判別図

諫早農業高校遺跡から出土した黒曜石製石器（図22）の蛍光X線分析の結果、A～Dの4群に分けることができた。

A群：32の1点が該当する。風化面が青灰色を呈する淀姫系黒曜石である。

B群：12・27が該当する。ややガラス質に乏しい黒色を呈する針尾I群である。

C群：24が該当する。透明感のない黒色黒曜石で針尾III群にあたる。

D群：本石器群の主体となる石材で、良質の漆黒色を呈する腰岳系黒曜石である。

結果は従来の肉眼観察と同様で腰岳系が圧倒的に多いものの僅少ではあるが針尾島周辺の黒曜石も使用していることが判明した。

定住生活に移行したとされる弥生時代にあって、こうした遠隔地の石材獲得が如何なるものであつたか今後の研究の進展が望まれる。

表12 黒曜石蛍光X線分析資料一覧

両載番号	ID	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	$Mn/(Mn+Fe)$	Sr分率	$log(Fe/K)$	原産地
図22-1	1064	72.51	25.25	616.41	320.29	96.54	130.24	219.91	41.76	4.10	12.59	0.93	腰岳系
図22-2	1033	68.88	24.69	577.48	306.84	91.79	124.07	211.23	41.81	4.28	12.51	0.94	腰岳系
図22-3	1034	61.63	22.73	532.35	297.85	92.55	125.74	212.21	40.89	4.27	12.71	0.94	腰岳系
図22-4	1007	69.62	23.68	594.90	315.01	97.44	129.89	219.07	41.37	3.98	12.80	0.93	腰岳系
図22-5	1052	66.90	24.46	589.76	324.65	100.51	132.43	223.13	41.58	4.15	12.87	0.95	腰岳系
図22-6	1047	66.22	22.41	534.46	296.86	92.43	123.82	208.39	41.14	4.19	12.81	0.91	腰岳系
図22-7	1051	58.95	20.98	505.72	283.49	87.98	121.91	205.02	40.59	4.15	12.60	0.93	腰岳系
図22-8	1013	63.98	23.70	538.94	304.89	89.17	126.31	211.61	41.64	4.40	12.19	0.93	腰岳系
図22-9	1055	64.56	24.13	575.43	317.85	94.97	130.89	219.80	41.61	4.19	12.44	0.95	腰岳系
図22-10	1059	61.83	22.40	551.92	290.51	90.53	121.10	206.03	41.02	4.06	12.78	0.95	腰岳系
図22-11	1005	70.23	24.48	610.06	326.82	100.15	132.78	224.36	41.68	4.01	12.77	0.94	腰岳系
図22-12	1048	66.17	27.25	761.37	258.45	184.42	111.59	357.17	28.43	3.58	20.21	1.08	針尾I群
図22-13	1046	69.46	25.84	620.18	325.07	97.84	134.75	220.78	41.76	4.17	12.57	0.95	腰岳系
図22-14	1029	62.59	24.25	574.68	306.73	93.74	127.97	211.16	41.47	4.22	12.67	0.96	腰岳系
図22-15	1009	77.18	27.15	673.04	359.85	109.77	145.79	238.47	42.14	4.03	12.86	0.94	腰岳系
図22-16	1025	68.34	24.07	593.40	322.46	97.81	130.41	219.58	41.86	4.06	12.70	0.94	腰岳系
図22-17	1070	73.55	25.86	623.62	327.92	99.98	134.66	222.28	41.75	4.15	12.75	0.93	腰岳系
図22-18	1011	60.78	21.97	536.53	300.25	89.99	125.71	211.91	41.25	4.10	12.36	0.95	腰岳系
図22-19	1054	83.94	27.94	658.01	351.42	104.44	140.68	228.58	42.59	4.25	12.66	0.89	腰岳系
図22-20	1071	63.49	25.65	570.86	296.87	93.00	126.10	210.32	40.87	4.49	12.81	0.95	腰岳系
図22-21	1062	70.59	25.82	614.95	333.44	104.15	135.99	228.26	41.58	4.20	12.99	0.94	腰岳系
図22-22	1061	65.72	23.42	556.80	303.92	92.20	125.87	208.47	41.57	4.21	12.83	0.93	腰岳系
図22-23	1068	60.02	21.37	542.30	294.78	89.75	122.73	208.94	41.16	3.94	12.53	0.96	腰岳系
図22-24	1012	67.57	25.84	648.03	295.38	121.57	107.20	287.00	33.37	3.99	15.70	0.98	針尾II群
図22-25	1072	68.06	24.04	588.72	321.86	97.74	132.93	228.49	41.30	4.08	12.55	0.95	腰岳系
図22-26	1063	65.94	24.31	563.33	310.57	94.60	126.57	217.29	41.46	4.30	12.63	0.93	腰岳系
図22-27	1035	64.53	27.57	754.91	251.85	162.96	107.85	373.03	28.10	3.65	18.20	1.07	針尾I群
図22-28	1029	68.51	23.77	575.64	304.43	91.17	126.48	208.37	41.88	4.13	12.48	0.94	腰岳系
図22-29	1053	70.95	25.50	664.22	327.24	99.87	133.40	221.46	41.85	3.84	12.77	0.97	腰岳系
図22-30	1006	74.83	28.35	649.71	335.29	98.70	136.49	228.03	42.10	4.06	12.39	0.94	腰岳系
図22-31	1008	69.08	25.01	633.86	327.44	98.62	131.95	223.76	41.88	3.95	12.61	0.96	腰岳系
図22-32	1010	60.06	28.04	605.08	225.72	203.21	103.54	379.47	24.75	3.48	22.28	1.13	淀姫系
図22-33	1021	66.31	24.42	588.80	311.84	96.18	129.28	216.67	41.34	4.15	12.76	0.95	腰岳系
図22-34	1022	63.34	25.47	630.98	313.57	93.93	130.71	218.28	41.45	4.04	12.42	1.00	腰岳系
図22-35	1030	64.11	23.75	556.10	300.31	89.03	123.03	209.74	41.59	4.27	12.33	0.94	腰岳系
図22-36	1014	78.40	28.74	705.45	362.91	107.80	147.18	245.11	42.05	4.07	12.49	0.95	腰岳系
図22-37	1016	67.57	23.08	582.25	318.89	97.08	131.49	218.93	41.70	3.96	12.70	0.94	腰岳系
図22-38	1002	68.59	24.32	593.59	317.54	96.81	129.83	217.78	41.67	4.10	12.71	0.94	腰岳系
図22-39	1015	72.50	27.60	652.32	336.47	101.95	141.55	233.88	41.34	4.23	12.53	0.95	腰岳系
図22-40	1001	67.30	23.99	617.88	317.77	93.99	132.32	219.67	41.81	3.88	12.31	0.96	腰岳系
図22-41	1028	71.43	25.62	595.79	327.92	101.27	134.22	225.91	41.54	4.30	12.83	0.92	腰岳系
図22-42	1050	65.94	23.53	559.08	303.75	94.43	129.73	218.65	40.69	4.21	12.65	0.93	腰岳系
図22-43	1004	67.19	26.94	580.09	320.44	99.26	133.85	227.51	41.03	4.64	12.71	0.94	腰岳系
図22-44	1060	73.33	25.12	576.10	316.49	92.93	128.25	211.30	42.26	4.36	12.41	0.90	腰岳系

2. 蔡棺墓と集落

第II章で触れたように当遺跡で本調査が実施されるのは初めてであり、伝聞のみであった蔡棺墓の存在を確認でき、かつ今も残る細型銅劍と同時期であったことは一定の意義が見出せる。検出した中期前葉の蔡棺墓は後の損壊を受けた複数の小児棺であったが、微小な骨片と焼土粒が検出された点はやや特異であった。発掘調査面積は小規模で当該期の集落の様相に言及することは難しいが、少なくとも今回の調査区周辺には青銅器が副葬されるような成人棺は存在せず、密集墓域でもないだろうことは指摘できよう。逆に当遺跡の中でも標高の高い学校校舎部分が、より階層の高い特定墓域が広がるような立地であったと想起される。

遺跡の年代として、細型銅劍や今回出土した土器の様相からは中期初頭～中期中葉の限られた年代幅が考えられる。一方で、範囲確認調査では後期後葉以降に有明海沿岸地域で成立・展開する肥前型器台片が出土している。また今回調査では古墳時代初頭の土器をはじめ、少量ながら古墳時代の土器が出土している。県本土域の拠点集落の一つである当遺跡が、中期から後期あるいは古墳時代にかけて、どのような盛衰を迎ったのか興味深いところである。

3. 中世

(1) 挖立柱建物跡

今回調査で主体を占めた中世の遺構・遺物は15世紀を中心とした時期のものと考えられる。掘立柱建物跡は柱穴の状況や出土遺物からみて、建て替えが行われながら16世紀には廃絶していたとみられる。柱穴の出土遺物の中で注目されるのは、懸仏と天目碗片、スタンプ文を有する瓦質の深鉢形火鉢片であろう。

瓦質火鉢は豊前地域の深鉢形C類に相当するタイプである。豊前地域では奈良火鉢の系譜から14世紀前半以降に出現する（佐藤2006）。特にC類は大和ではほとんど出土せず豊前地域の在地産と考えられている。さらに、14世紀代の奈良火鉢模倣品は寺社関連遺跡や居館跡に出土分布が限られ、調度品や荘厳具の一部として搬入されるという。14世紀後半以降はこうした特殊空間での限定的使用から、暖房機能を第一義に使用階層が広がるとされる。

長崎県域でのスタンプ文を有する深鉢形火鉢に目を転じると15・16世紀の城館跡に目立って出土している。諫早氏に先立つ西郷氏の居館跡とも目される諫早家御屋敷跡の溝状遺構（16世紀後半）や、大村純忠終焉の居館跡とされる坂口館跡（15世紀後葉

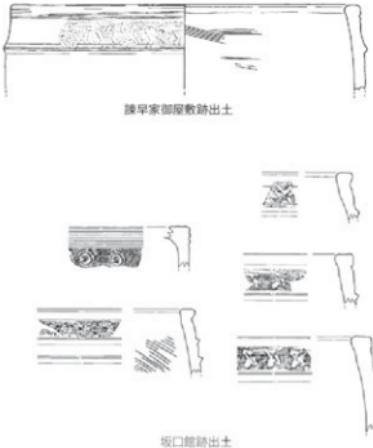


図25 スタンプ文瓦質火鉢の類例 (S=1/4)

～16世紀末)、雲仙市筏B遺跡の区画溝(15世紀代)などが挙げられる。今回調査の出土事例も合わせ考えると、使用階層の広がる15・16世紀においてなお限定的な階層で保有され、少なくとも一般集落での保有は未だ少ない段階とも考えうる状況である。

掘立柱建物跡やその他のピット群は、出土遺物の年代観や出土炭化材の年代測定結果から、14世紀後半から15世紀前後を主とした遺構群と考えられる。時代背景としては室町時代南北朝期から戦国期にかけての時期にあたる。伊佐早氏船越城期から西郷氏との争いを経て西郷氏の一支城となっていた時期であろう。そもそも遺跡を切り抜くような小規模調査で居館や船越城を語ることは至難だが、当該期の城館及びその周辺施設を考える上で一つの定点になるものと考えられる。

(2) 火葬土坑

掘立柱建物跡とともに中世の調査で大きな成果となったのが火葬土坑の可能性のあるST01である。長楕円形の掘方の四隅に配置された棺台石が特徴的で、当初は木棺墓の可能性を考えていたが、副葬品及び釘が出土しない点や棺台石に被熱の痕跡が認められる点、また類例の参照から火葬土坑の可能性を挙げた。棺台石を有する火葬土坑や墓について九州内の中世墓資料集成を概観すると(狭川編2004)、福岡県域に数多く見受けられるが、長崎や大分・熊本・九州南部ではほとんど見当たらない。

福岡県糸島市前原の奈良尾遺跡では今宿バイパス関連の発掘調査で、低山地の急斜面で多数の火葬土坑や土坑墓が検出されている(中間1991)。棺台石を掘方の両端に各1点配置するものや両端と中央に各2点の計6点配置するものなど多様である(図25)。青磁碗や土師質壺等の供献品が出土するものが多く、釘の残存する例もある。中間氏は冒頭で火葬墓と火葬土坑を峻別する必要性に触れ、残存しやすい焼骨が残る中で歯が全く検出できない場合は集骨が行われており墓とは見做し得ないとしている。氏はまた、報告書中で福岡県域の主要な火葬土坑を集成しその変遷を明らかにしている。14世紀後半から16世紀前半にかけて、掘方の長さが2m弱から1m弱にまで小型化し、伸展状から屈臥状へという葬法自体の変容を指摘する。さらに16世紀後半以降、蹲坐の姿勢で桶棺を使用する土葬が出現するが、過渡期には踞坐状の火葬土坑が併存したという。

一方で同様の棺台石を有する遺構に木棺墓も存在する。大宰府条坊跡50次調査ST320では、棺台石6点が配置された掘方内部で青磁碗や土師質小皿等の供献品が出土している。さらに埋土中に木棺痕跡が検出されるとともに、掘方底面では木棺の形状を如実に示すように大量の釘が出土している。鳥栖市の田代公園遺跡では、6点の棺台石を配する掘方内部で供献品の青磁碗が出土し、釘が認められないしながらも木棺墓の可能性を挙げている。

当遺跡の事例について今一度考えると、やはり釘が検出されていない点で木棺墓の可能性は低いと考えられる。掘方底面より上は削平を受けているため壁面の被熱痕跡には言及できない。灰や炭化物は検出されていないが、被熱痕跡のある棺台石を根拠に火葬土坑としておきたい。隣接するSK02では掘方底面の被熱痕跡や焼土・炭化物粒が認められている。やや離れたSL02では顕著な焼土が形成されており台石状の礎が据え置かれている。ST01と同様に火葬に関連する遺構であるのかもしれない。

ところでこれら遺構の年代観について出土遺物からは詳細な年代を特定できないが、ST01やSK02は掘立柱建物跡SB03と重複するためSB03の前後の時期のものであろう。地域は異なるものの奈良尾遺跡の変遷観を当てはめると、ST01の掘方は187cmと長く伸展状であると言えそうである。火葬土

坑としては古手の14世紀後半が想定でき、おそらくSB03より以前に存在したと考えられる。

(3) 小結

中世の遺構群について考えうる評価を試みた。火葬土坑に関しては県内で類例が知られておらず中世の葬送を考える際の一資料となろう。掘立柱建物跡を含め、年代的には伊佐早氏や西郷氏が利用したであろう船越城の時代と重なる。城館や集落研究、当地域をはじめとした中世史を考える上で活用されれば幸いである。

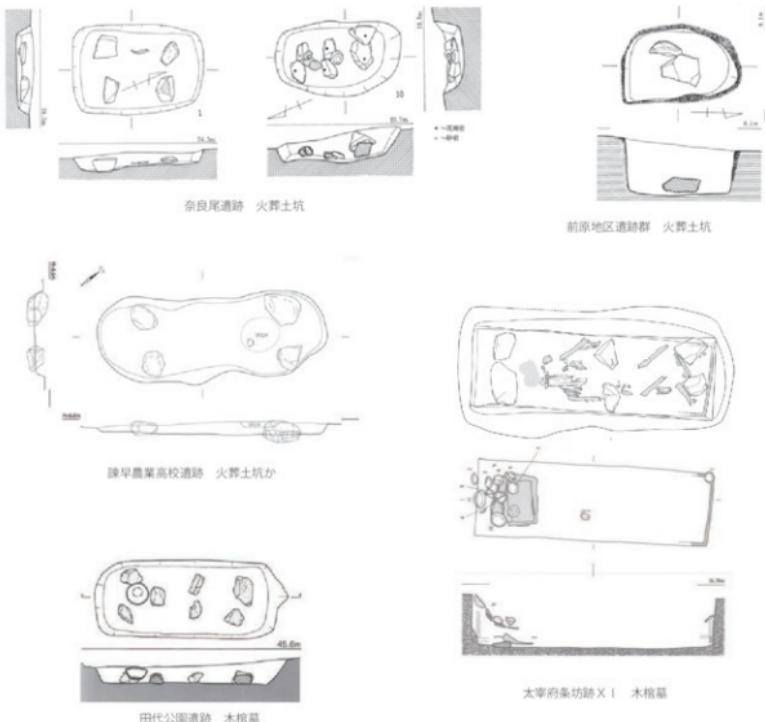


図26 火葬土坑・木棺墓類例 (S=1/40)

引用・参考文献

【遺跡の環境】

諫早市 2014 「III沿革」『市民概要 2014』

諫早市文化振興課 2016 「小栗 C 地点遺跡」『諫早市文化財調査年報 II』諫早市教育委員会

片多雅樹・吉井康史・白石深渕 2014 「三次元計測器および 3D プリンターを用いた銅劍の復元へ諫早農業高校
遺跡出土銅劍の例へ」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第 4 号 長崎県埋蔵文化財センター

川瀬雄一 2008 「貝津横島 B 遺跡」諫早市教育委員会

木下良 1994 「被杵郡と高来郡の古代駅路」『諫早史談』26 諫早史談会

木本雅康 2011 『古代官道の歴史地理』同成社

九州地方土木地質図編纂委員会 1985 「九州地方土木地質図解説書」

産業技術総合研究所 地質調査総合センター・ウェブサイト「20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2」

正林謙 1971 「諫早市出土の銅劍」『九州考古学』

田川肇 1985 「小栗 B 遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報 VIII』長崎県教育委員会

秀島貞康 1983 「林ノ辻遺跡」諫早市教育委員会

秀島貞康編 2009 「上野町遺跡 1127、1159 地点」諫早市教育委員会

秀島貞康 1992 「小栗遺跡 C 地点」諫早市教育委員会

宮崎貴夫 2015 「長崎県本土地域の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・
九州考古学会合同研究大会

【弥生土器】

平美典 2004 「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」『弥生中期土器の併行関係』第 53 回埋蔵文
化財研究集会

【古式土師器】

蒲原宏行 2017 「佐賀・唐津平野」『九州島における古式土師器』第 19 回九州前方後円墳研究会長崎大会発表要旨集・
基本資料集

小松謙 2002 「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器』第 5 回九州前方
後円墳研究会佐賀大会発表要旨資料

【中世墓】

瓜生秀文 1993 『前原地区遺跡群 III』前原市教育委員会

狹川真一編 1999 「大宰府条坊跡 X I」太宰府市教育委員会

狹川真一編 2004 「中世墓資料集成・九州・沖縄編 (1)・(2) - 」中世墓資料集成研究会

徳永貞昭 2002 「田代公園遺跡」『袖比遺跡群 2』佐賀県教育委員会

中島恒次郎 2009 「九州の中世墓」『日本の中世墓』高志書院

中間研志 1991 「奈良尾遺跡」福岡県教育委員会

【中世土器】

佐藤浩司 1991 「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究 VII』

佐藤浩司 2006 「スタンプ文を有する瓦質土器の展開」『陶磁器の社会史－吉岡康暢先生古希記念論集－』

立石堅志・銀柄俊夫「瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

徳永貞紹 1990 「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究 VI』

中島恒次郎 1992 「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究 VIII』

林隆広 2011 「諫早家御屋敷跡」長崎県教育委員会

宮崎貴夫 1991 「坂口館跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VIII』長崎県教育委員会

村子晴奈 2015 「雲仙市国見町後 B 遺跡」『平成 26 年度長崎県考古学会総会発表要旨』

森隆 1995 「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

【その他】

九州国立博物館 2013 『江戸のモダニズム 古武雄 まぼろしの九州のやきもの』

藤木聰 2007 「長崎発・火打石事情」『西海考古』第 7 号

盛峰雄 2000 「陶器の編年 1. 瓢・皿」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会



写真12 平成27年度範囲確認調査トレンチ土層断面状況（東から）



写真13 表土掘削状況（西から）



写真14 遺構調査状況（西から。金比羅岳方面を望む）

写真図版 2



写真 15 北東半 1 遺構検出状況（南から）



写真 16 北東半 2 遺構検出状況（南から）



写真 17 北西半 1 遺構検出状況（南から）



写真 18 南東半 1 遺構検出状況（北から）



写真 19 南東半 2 遺構検出状況（北から）



写真 20 南西半 2 遺構検出状況（北から）

写真図版 4



写真 21 SU06 (ST04) 検出状況（西から）



写真 22 ST04 骨片・焼土粒検出状況（西から）



写真 23 ST04 完掘状況（北から）



写真 24 SU03 検出状況（南から）



写真 25 SU04 検出状況（南から） ※焼土範囲が SL03



写真 26 遺物出土状況（南東から） ※奥の竹串が垂飾

写真図版 6



写真 27 SL03 断割状況（西から）



写真 28 SP218 半裁状況（南から）



写真 29 ST01 検出状況（東から）



写真 30 ST01 半裁状況（南東から）



写真 31 SK02 半裁状況（南から）



写真 32 SK02 底面検出状況（南から）



写真 33 SK01 完掘状況（南から）



写真 34 SK03 検出状況（北から）



写真 35 SL01 検出状況（北から）



写真 36 SL01 断割状況（南から）



写真 37 SL02 検出状況（北から）



写真 38 SL02 半裁状況（東から）



写真 39 SP01 (SB03) 半裁状況（南から）



写真 40 SP150 (SB03) 半裁状況（西から）



写真 41 SP150 (SB03) 完掘状況（北から）



写真 42 SP11 (SB03) 半裁状況（東から）

写真図版 8



写真 43 SP159 (SB03) 半裁状況（西から）



写真 44 SP159 (SB03) 碓板石出土状況（北西から）



写真 45 SP137 (SB03) 碓板石出土状況（東から）



写真 46 SP226 (SB03) 半裁状況（南から）



写真 47 SP226 (SB03) 遺物出土状況（南から）



写真 48 SP226 (SB03) 完掘状況（北から）



写真 49 SP225 (SB03) 碓板石出土状況（北から）



写真 50 SP225 (SB03) 完掘状況（北から）



写真 51 SP63(SB03) 半裁状況（南から）



写真 52 SP22(SB03) 础板石出土状況（北西から）



写真 53 SP107(SB03 底) 半裁状況（南から）



写真 54 SP69(SB03 底) 半裁状況（南から）



写真 55 SP48 遺物出土状況（南から）



写真 56 SP03 遺物出土状況（南から）



写真 57 SP195 半裁状況（西から）



写真 58 SP117 半裁状況（北から）

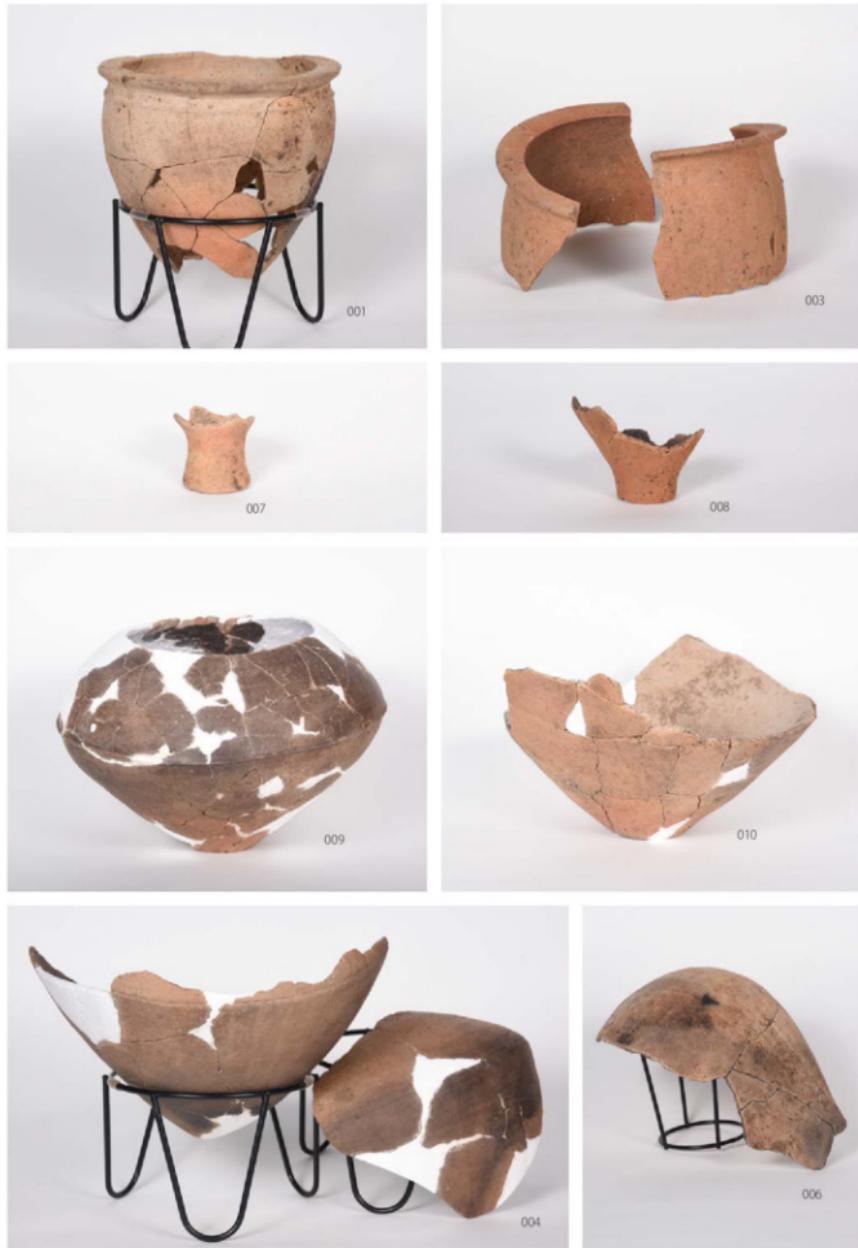


写真 59 葬棺墓 ST04 出土土器 1



写真 60 葬棺墓 ST04 出土土器 2



写真 61 土器集中・包含層出土土器（弥生時代）

写真図版 12



写真 62 SP81・218 出土土器、包含層出土土器（古墳時代）



写真 63 SB03 出土土器・陶磁器（中世）

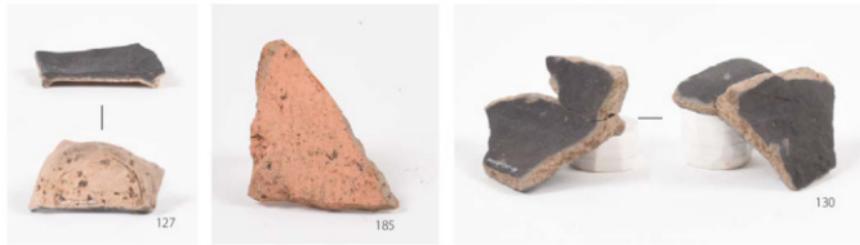


写真 64 ピット SP 出土土器（古代・中世）



写真 65 包含層出土土器・陶磁器（古代・中世）1



写真 66 包含層出土土器・陶磁器（古代・中世）2

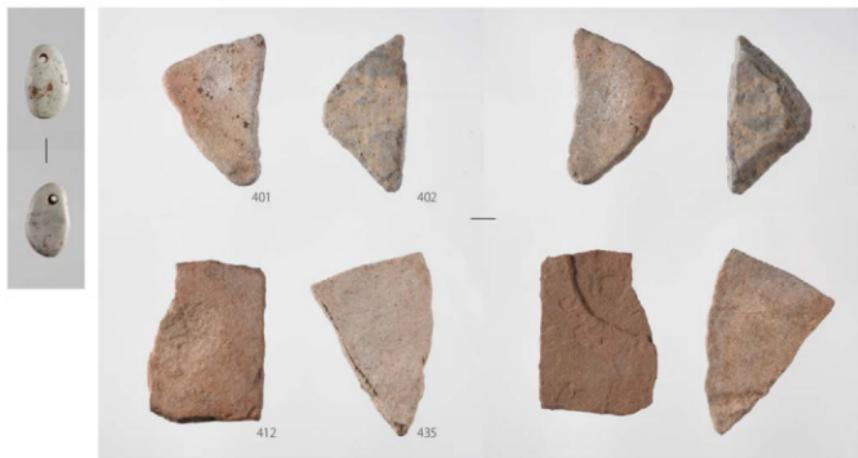


写真 67 遺構・包含層出土石器（弥生時代）

報告書抄録

ふりがな	いさはやのうぎょうこうこういせき						
書名	諫早農業高校遺跡						
副書名	平成29年度諫早農業高校草花管理室・収納室改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号名	第24集						
編著者名	松元一浩						
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒811-5322 長崎県諫岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 電話0920(45)4080						
発行年月日	西暦2018年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"/>	東経 °'\"/>	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いさはやのうぎょうこうこういせき 諫早農業高校遺跡	ながさきけんいさはやし 長崎県諫早市 たていちらう 立石町	42204	90-29	32° 50' 15"	130° 3' 38"	本調査 2017.5.8～ 2017.6.9	200 m ²	学校建設

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諫早農業高校遺跡	墳墓 遺物包含地	弥生時代 古墳時代 古代・中世	甕棺墓1(小堀棺) 焼土遺構1 土器埋設ピット2 掘立柱建物跡1 ピット群 火葬土坑1(あるいは木棺墓か) 土坑2 焼土遺構1	弥生土器 台石 剥片(黒曜石・ 安山岩製) 土師器 須恵器 縁軸陶器 黒色土器 土師質土器 瓦質土器(火鉢・ 羽釜) 国産陶器 貿易陶磁(青磁) 銅製仏像(掛仏)	城ノ越式～ 須玖I式 古式土師器 庄内系椀形高坏 室町時代(南北朝 期～戦国期)

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第24集

諫早農業高校遺跡

2018(平成30)年3月31日

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂